伝書鳩

第24号

井上靖記念文化財団

野　分　(一)

漂泊の果てについに行きついた秋の落莫たるこころが、どうして冬のきびしい静けさに移りゆけるであろう。秋と冬の間の、どうにも出来ぬ谷の底から吹き上げてくる、いわば季節の慟哭とでも名付くべき風があった。

それは日に何回となく、ここ中国山脈の尾根一帯の村々を二つに割り、満目のくま笹をゆるがせ、美作より伯耆へと吹き渡って行った。風道にひそむ猪の群れ群れが、牙をため地にひれ伏して耐えるのは、石をもそうけ立たせるその風の非常の凄じさではなく、それが遠のいて行った後の、うつろな十一月の陽の白い輝きであった。

（詩集『北国』より）

伝書鳩 第24号　目次

野分㈠（詩）　井上靖……2

ご挨拶　浦城義明……6

「野分」と私ども　杉本研士……8

第六回　井上靖記念文化賞　吉増剛造氏・山本ひろ子氏に……12

井上靖未発表資料＊8

終戦前後日記 2（監修・解説　高木伸幸）……20

ふたりの井上靖　黒田次郎……50

令和四年度　事業報告……54

鳩のおしらせ……63

鳩のカット　福井欧夏

花のカット　黒田佳子

奥付のカット　岩永　泉

ご挨拶

理事長　浦城義明

長く続いたコロナ禍が収束に向かい、日常がようやく戻り始めた二〇二三年。今年はいろいろと節目の年となりました。まず靖の三十三回忌の年に当たります。亡くなったのが一九九一年一月。私にとって社会人一年目の年であり、そう思うと随分と年月が経った気がします。初代理事長の祖母ふみが亡くなってからは十五年が経ちました。こちらはもうそんなに経つのかという思いです。子供や孫、ひ孫たち大勢に見守られながら臨終を迎えた時のことを今でも鮮明に覚えています。

そして、静岡県長泉町の「井上靖文学館」が開館五十周年を迎えました。一九七三年十一月、おめかしをして、開館式典に参列した当時の私の写真が残っています。しかし、自身の記憶はかなり曖昧です。文学館は当初スルガ銀行の支援で設立されましたが、一昨年より運営母体が長泉町にかわりました。この度の五十周年を記念して、地元の彫刻家・堤直美さんが制作した立派な靖のブロンズ像が前庭に建てられました。皆様も一度足をお運びいただければと思います。

北海道旭川市の「井上靖記念館」は三十周年です。当財団が設立された翌年、一九九三年七月に開館。その後世田谷の家の応接間、書斎が移築されました。毎年開催しているエッセーコンクールには全国の中高生からの応募があり、十二回目を迎えた今回は北海道や東京、大阪だけでなく沖縄の中学生からも入賞者が出ています。

両館とも今年はさまざまな周年事業が行われています。活動を続けていく上で多くのご苦労があったかと思いますが、今では地元に根づいた文化発信の拠点となっています。長く続けてくださった関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

新型コロナウイルスが五類感染症に移行した五月には、三年ぶりに井上靖記念文化賞の贈呈式を執り行うことができました。本賞に吉増剛造氏、特別賞に山本ひろ子氏が受賞され、お二方とも素晴らしい記念講演をしてくださいました。

こうして理事長就任一年目は、あっという間に過ぎてしまったというのが実感です。皆様の温かいご協力のもと、何とかやってこられました。引き続き、よろしくお願いいたします。

令和五年十二月吉日

「野分」と私ども

杉本研士（元関東医療少年院長）

縁あって、私が井上靖氏の姪（氏の妹・波満子の娘・陽子）と結婚してから、瞬く間に半世紀以上もが経った。

その結婚の折に、私どもは井上靖氏から心躍るものを頂いた。詩の一編をあらためて楷書してくれたのである。題に「野分」とあった。

　漂泊の果てについに行きついた秋の落莫たるこころが、どうして冬のきびしい静けさに移りゆけるであろう

硬質清冽なものが、大判で厚手の原稿用紙二枚の上に、彫刻刀を使ったように刻み込まれていた。それからよく見ることになった太いペン字である。

「えらいことになった」と私は思った。この詩は氏の初期に、それも終戦の直後に発表されたものであることは、その頃の私も知っていた。

ここで氏は、長く続いた混迷と戦乱の年月を自分にとっても同胞にとっても漂泊と捉え、その消耗から回復するために苦闘しなければならない姿を猪の群れ群れに託し、彼らを「石をもそうけ立たせる」寒風の中に置いている。

他の詩と同じように墨絵を見るように視覚的なので、私も光景の中から何頭かの猪の有様を容易にクローズアップすることができた。拙劣乱暴であるが、メモのようである（図①）。

猪たちはみんな地にひれ伏して耐えている。しかし、直ぐに感じられることがある。猪たちは畏れてはいるけれど、怯えたりひるんだりしてはいない。「牙をため」とあるように、機会に備えて力を備えているのである。

はたして井上靖氏は終戦記事を書くことで区切りを付けるや、はじかれたように自分を全開させて次々と積み上げ、若輩の私どもが結婚する頃には、最後の文豪と呼ばれるに相応しいまでのものを築き上げており、それでいながら、なおも猛進しつつあった。

図①

図②

すると「野分」の主役は猪の群れではなく、風が遠のいていった後も、なお、「うつろな白い陽の輝き」に向かい合っているしたたかな一頭の猪であり、氏自身である。図のように表象された（図②）。

氏は時間を割いて、自選して詩をしたためてくれた。「私の姿勢はこれです。あなた達もそれなりに頑張りなさい」という強いメッセージに違いなかった。目に触れるたびに姿勢を正さざるを得なくなってしまった。えらいことになってしまった。

それから何年か経った頃、私は氏の母堂について相談を受けた。八重さんのことは義母の波満子からしばしば様子を聞かされていて、症状の核心である全体の老化現象についてはもとより抗うことはできないものの、随伴する不安や不穏、夜間の徘徊、幻覚などについてはどうにかなるかもしれないと考えていた。老齢であるから有効安全域は狭いけれど、思い切ってメジャーな向精神薬をごく微量に使うと良い結果が

得られることがある。

八重さんを診に湯ヶ島に行った。直接に眼底の血管の様子を確かめておきたかったので、携帯式の眼底鏡を片手に構え、のしかかるような格好で顔に近付けた。八重さんは華奢な身を縮めるようにして、

「あなた誰ですか」と言った。

「おばあちゃんを診てくれているお医者さんじゃないですか」と横にいた陽子が言うと、

「医者にもいろいろあるからね」と続けた。

「ぼんやり天井を見ていてください。すぐ済ませますから」と私が指示すると、

「あなたがそうして邪魔しているから、天井は見えませんよ」と指摘した。

なるほど、と私は思った。仮に「変な医者だね」と言われたとすると、これはマイナスなだけの評価であろうが、「医者にもいろいろあるからね」というのはさまざまな可能性を網羅して正確であり、冷徹でさえある。八重さんの芯のようなものを垣間見た思いがし、メジャーな向精神薬との相性が期待できるのではないかという予感がした。

八重さんの周辺症状は軽減し、それだけ、周囲の人たちにも本人にも、穏やかさが戻るようになった。けれど、いずれもが終焉に向かう生き物というものの命運に沿って、ゆっくりと透き通っていった。後に著された氏の「雪の面」に次のようにある。

すでに舞台の照明は消え、あらゆるきらびやかな道具立ては闇に飲み込まれてしまっている。……母は今幼時生い育った家にひとり住んでいる。夜毎、母の周囲には雪が落ちている。今は忘れてしまった遠い若い日に心に刻まれた白い雪の面だけを、母は見守っている

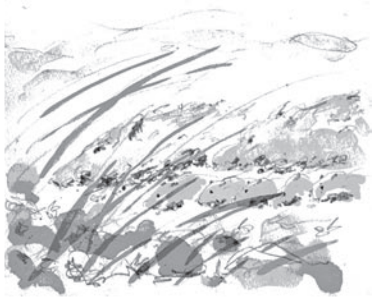
母堂の葬儀が終わった日の夕方、氏は湯ヶ島の庭の一番高いところに私を誘い、そこへ何本かのビールを運ばせた。

芝の上に並んで腰を降ろすと、北西の方向に富士山のシルエットが見えた。

母の最終の年月と家人の何年間かの安らぎを助けてくれたとして、氏は私に改めて礼を述べた。

「のっけに、医者にもいろいろあるからねと言われてましたから一生懸命でした。寿命を延ばせたかというと……」と答えると、「そうしたものだろうね」「なるほど、母らしい物言いだね」と氏も笑った。

風は無く、富士の輪郭はいよいよ濃くなってきていた。私にとっては忘れられないひと時になった。


図③

それからも、氏は何年も何年も闘い続けた。漂泊しても、漂着しても、風が有っても無くても、本来そのようなものとは無関係に降り続けるうつろで白い陽の光があることに苛立ち、あるいはその輝きがあるからこそ進み続けたのであろう。傍にはそんなふうにうかがえることがあった。

陽子も私も、身体のどこそこにさしつかえが出て、それが次々と積み上がってゆく歳になった。そうした私たちの日々のありきたりの景色にも、悠久な宇宙を貫くうつろで白い陽は落ち続けている。誰にもどうにもならないものである。

額装した「野分」は、客間というべき部屋の欄間に居ついたまま動こうとしない。折々に見上げては、その都度猪の群れを想起する。

その猪たちは昔と同じように揃って風にひれ伏して耐えている。が、何時の頃からか、私には群の中に何匹かの子供たちの姿が混じって見えるようになってきた。ウリボウたちは本当に可愛らしい（図③）。

猪も、私どもも、ウリボウたちも、うつろな白い陽の降る中をそれぞれに生きる。それで良いのだと思えるようになってきている。

第六回　井上靖記念文化賞　吉増剛造氏・山本ひろ子氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人または団体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しました。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯、各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

第六回井上靖記念文化賞の選考委員会は、令和五年二月十八日に東京都内にて、贈呈式は、令和五年五月二十日にアートホテル旭川（北海道旭川市）にて行われました。

第六回　井上靖記念文化賞

吉増剛造（よしますごうぞう）

詩人

贈賞理由

吉増剛造氏は現在、日本で最も活きのいい詩人である。かつ最も純粋な詩人である。『黄金詩篇』から始まる彼の詩作活動の泉は今に至るまで枯れることなく、こんこんと日本語の世界を豊かに潤し、芳醇な詩的精神文化を醸成している。半世紀以上にわたる彼の詩と声は、さながら宇宙の中心にある大樹の如く我々の生と思念を支え、井上靖の詩的世界に通底する。我々は、井上靖記念文化賞に最も適しい詩人を選ぶことが出来た。

受賞のことば

天命の夢

春の奇跡ということも叶います、この第六回井上靖記念文化賞を、特別賞の山本ひろ子さまとともに、いただきました。その空気のなかで、幼い頃、そう七十年前に読みました『蒼き狼』『氷壁』等を想起しながら、沢山の井上靖作品の名作を読み返しまして、たったいま、〝想起〟という言葉を使いましたのですが、この〝思い（ひ）出ず〟、遠く深い心の働きが井上靖作品の核心にあるものだということにも気がついておりました。

『井上靖全詩集』、『しろばんば』、『幼き日のこと』、『猟銃』、『後白河院』と読みすすめて来て、印象深く残

りましたのが、『本覚坊遺文』と『孔子』でした。就中、井上さん、生涯最後の長篇『孔子』は、類例のない傑作でした……。その中に、忘れられません、あの声が……

甚だしいかな、吾が衰えたるや。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず

わたしたちの心の最深部にまでとどく、あの声が響いてきます。いわゆる「天命」はこの夢のことをさしているのかも知れません。旭川から、こうして〝夢の賞〟をいただきました。旭川の皆様に、選考委員の諸氏に、敬意と感謝を申し上げつつ、この小文を、〝天命の夢〟と名付けようと思います。ありがとうございました。

経歴

一九三九年東京生まれ。慶應義塾大学文学部国文科卒業。在学中から『三田詩人』『ドラムカン』を中心に詩作を試みる。六〇年代より詩の朗読を始め、世界各地で先鋭的なパフォーマンスを行なう。近年は銅板オブジェや写真、映像作品も手掛ける。二〇一二年より旭川市井上靖記念館青少年エッセーコンクール審査員長。二〇一五年三田文学会理事長就任。二〇一三年文化功労者、二〇一五年恩賜賞・日本藝術院賞（日本藝術院会員）。

主な著書

一九七〇年　『黄金詩篇』（高見順賞）
一九七九年　『熱風　a thousand steps』（藤村記念歴程賞）
一九八四年　『オシリス、石ノ神』（現代詩花椿賞）
一九九一年　『螺旋歌』（詩歌文学館賞）
一九九八年　『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』（芸術選奨文部大臣賞）
二〇〇八年　『表紙　omote-gami』（毎日芸術賞）
二〇〇九年　『キセキ　gozoCiné』　など

選評　美が第一とはかぎらない

辻原　登

吉増剛造氏は「現代詩」の詩人というだけではない。日本語の無限の可能性をどこまでも探求し、実現して行く稀有な文学者である。

氏を一躍、詩壇に押し上げ、現代詩の新たな旗手としての姿を鮮明にしたのは、昭和四十五年（一九七〇）に刊行された詩集『黄金詩篇』（第一回高見順賞）だが、この年、三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊駐屯地でクーデターを呼び掛けて自決した。二年後には連合赤軍による浅間山荘事件が起きた。

『黄金詩篇』に収められた詩篇の数々は、時代の変革期、敗戦後日本の歴史の中で最も大きな、危険な曲り角を詩によって照射し、文学の進むべき道を詩的言語によって模索し、その先を指し示した。

朝焼けや乳房が美しいとはかぎらない
美が第一とはかぎらない
（『黄金詩篇』「朝狂って」から）

以来、現在に至る氏の詩の業績は評価し切れないほど深く、多彩である。詩人・思想家の吉本隆明が一九九七年のインタビューで、日本でプロフェッショナルだと言える詩人として、田村隆一、谷川俊太郎、吉増剛造の三人を挙げている。それからさらに二十六年、今なお旺盛な詩作に加え、詩の朗読パフォーマンス、写真・映画制作など、その活躍は目を瞠るものがある。

また三田文学会理事長として後身の文学者の指導・育成や、旭川市井上靖記念館青少年エッセーコンクール審査員長など、詩人の枠を越えた様々な社会文化活動への貢献、協力を厭わない姿勢は、万人からの敬意と称賛に値する。この度の授賞ほどそのことを顕著に表すものはない。

第六回　井上靖記念文化賞　特別賞

山本ひろ子（やまもと・ひろこ）

和光大学名誉教授・私塾「成城寺小屋講座」代表

贈賞理由

山本ひろ子氏は日本の中世神話の大成者である。これまで記紀神話＝国家神道に染められていた神話学を更新し、民俗＝民族の根にある異神たちへの想像力と信仰の力とを解放した。それは真にユニークで、文化論的な業績である。

受賞のことば

井上靖記念文化賞特別賞受賞のお知らせに、とても驚きました。賞はもちろんのこと、いわゆる学会やアカデミーの世界とは無縁な私だったので。

勉学の愉しさ・きびしさを体験したのは、二十代後半、書評誌の案内でふと知った「寺小屋教室」です。それから七年余。〝自らの思想は自らの手で〟がキャッチフレーズの「寺小屋教室」で、思想系の本を読み漁り、夜な夜な酒場で議論しました。もう半世紀も前なのに、そのときの学知のありよう、方法としての「原典講読」やテーマが、今なお私の中に息づいています。

後年、小さな研究会を経て、私塾「成城寺小屋講座」をつくりました。一〇人程度の集まりで、研究会・報告会を実践。「屋根裏通信」という手作り冊子も出し続けて今に至ります。

今回の受賞を、寺小屋の仲間たちがことのほか喜んでくれました。五冊だけですが、マイナーな内容の本を刊行してこられたのも、知らない誰かが読んでいる、誰かが待っていてくれるからこそ。今回の受賞にも、視えない世界からのエールがあったのかもしれません。私の中世の盟友、摩多羅神、新羅明神、牛頭天王、宇賀神王という異神たちです。

みなさま、ありがとうございました。

旭川のまぶしい五月の陽光と受賞を祝ってくださる方々の眼差しを浴びて、これからも東京の片隅で気儘に、けれど触覚は尖らせつつ、勉強に文筆に遊興にといそしんでいきたいと思っております。

経歴

千葉県市川市生まれ。早稲田大学第一文学部史学科中退。一九七〇年代半ば、原典講読を旨とした高田馬場の「寺小屋教室」に参加、政治思想や中世日本の神々について学ぶ。現在、私塾「成城寺小屋講座」を主宰し、神楽・祭祀を中心とした講座、現地見学を実施。フェリス女学院大学非常勤講師などを経て、和光大学表現学部教授。二〇一七年三月退職。

主な著書

一九九三年『大荒神頌』（岩波書店）
一九九三年『変成譜 中世神仏習合の世界』（春秋社）
一九九八年『異神 中世日本の秘教的世界』（平凡社）
一九九八年『中世神話』（岩波新書）
二〇二二年『摩多羅神 われらいかなる縁ありて』（春秋社）

選評　異神たちの祭儀を寿ぐ　　川村　湊

山本ひろ子氏は、厳密なテキスト（古文書）の解読と、民俗的な祭事や行事についてのフィールド・ワークを通じて、「中世日本神話」の世界を集大成した。その神話における神々は、仏教、神道、道教、修験道のみならず、いわゆるシンクレティズムの多様性を実現するものであり、異神たちに対する想像力と信仰の源は、中世以来の日本人の心性に根ざすものであった。

記紀神話が古代からの天皇制の政治的な意図の下に編纂され、その圏域内にあるものとすれば、そうした

神統譜の埒外にある中世の異神たちの乱舞し、勇躍する姿態は、支配者としての時の政治権力を打ち破るものであり、民衆的想像力（そして創造力）の全面的な解放だった。

祇園神（牛頭天王）、山王神、新羅明神、赤山明神、狩場明神、八幡神、荼吉尼神、摩多羅神……山本氏がその学問の庭に勧請してくる神々は、魅力的であると同時に畏怖される存在であって、大本教の艮の金神のように、世界の片隅に追いやられ、埋没させられていたのである。

山本氏の方法はアカデミックであると同時に、非アカデミックな、民間学的なものである。それは柳田国男的な民俗学と折口信夫的な文学とが融合し、南方熊楠的な実践的な探究とが重ね合わされている。花祭、山神楽、里神楽などの現場を渉猟し、人々とともに祭儀や神事芸能の場に溶け込むことを山本氏は厭わない。

また、私塾「成城寺小屋講座」を組織し、主宰して後進の研究者、実践者を育成していることは、山本氏の教育者、組織者としての能力の高さを示しているものだろう。それは山本ひろ子氏の学問が、一九七〇年代の「寺子屋教室」にその源を発し、旧制度としての大学を解体し、「知」の体系そのものの変革を目指していたことと無縁ではないだろう。

学術として神話研究、神話学、芸能論に携わる研究者は少なくない。だが、そこに文学的想像力を持ち込み、奔放な創作の力を発揮させ、真の文化的業績となしえたのは、山本ひろ子氏の功績として高く評価されるべきものなのである。

井上靖記念文化賞・歴代受賞者

第一回受賞者

菅野昭正（世田谷文学館館長・文芸評論家）
小田　豊（六花亭製菓株式会社前代表取締役社長）

第二回受賞者

芳賀　徹（東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授）
織田憲嗣（東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネーター）

第三回受賞者

大城立裕（作家）
伊藤一彦（歌人・若山牧水記念文学館館長）

第四回受賞者

宮本　輝（作家）
岡野弘彦（歌人・國學院大學名誉教授）

第五回受賞者

熊川哲也（バレエダンサー・Kバレエカンパニー芸術監督）
藤原良雄（株式会社藤原書店代表取締役社長）

井上靖記念文化賞・選考委員会委員

赤木国香（北海道新聞社文化部長（当時））
川村　湊（文芸評論家・法政大学名誉教授）
栗原小巻（女優・日本中国文化交流協会副会長）
酒井忠康（美術評論家・世田谷美術館館長）
辻原　登（作家・県立神奈川近代文学館館長）

（五十音順）

なお、井上靖記念文化賞が再スタートして以来、選考委員をお務めくださいました辻原登先生、酒井忠康先生が、第六回をもちまして任期満了により退任されることになりました。これまでのご尽力に心より御礼申し上げます。

連載 井上靖未発表資料＊8

終戦前後日記 ②

一九四〇年三月一日〜九月二十三日／一九四四年一月十一日〜三十一日

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、別府大学教授・井上靖研究会会長の高木伸幸氏に監修をお願いして、順次紹介していくものです。

前回より、一九四〇年一月十六日から一九四六年四月四日までの日記帳三冊の紹介を進めています。日記には、戦時下という特殊な状況に翻弄されながらも、美術・宗教欄担当の記者として東奔西走する様子が書き留められています。

連載第八回では一九四〇年三月一日〜九月二十三日、一九四四年一月十一日〜三十一日の期間を公開します。一九四〇年の日記からは、記者として多忙に過ごす様子と旺盛な読書欲が窺えますが、一九四四年になると「いよいよ超非常時の感である」と記されるように、食料や金策についての記述が目立つようになります。

原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字・脱字・衍字・句読点の漏れなどについては、断りなく直しました。傍点は原文通りです。今日の人権意識からすると不適切な表現がありますが、時代背景を考慮しそのままとしました。

（昭和十五年）

三・一　起きてみると一面薄い雪を冠つてゐる。寒い。今日から仕事始め。まづ三月の予定をたてる。

夜八時――十時　執筆 ｝平日
朝八時――十時　執筆

木曜及日曜はその日により自由に執筆時間を五時間決めること。

三月中の読書

アラン　文学語録 ｝徳田秋声 ~~志賀直哉~~
ジイド　芸術論　　ジイド
伊藤整　文学論　　プルースト
片岡良一　近世作家と作品〔『近代日本の作家と作品』の誤りか〕

三・二　打合せ会、仕事なし

三・三　日曜、めつきり春めいてくる。午前、写真の整理。午後、二階片附け、幾世〔長女〕のお相手で田圃へ出る。たまの日曜なので、サービスしてやる。夜、藤井〔沼津中学時代の友人・藤井壽雄。『夏草冬濤』の藤尾のモデル〕、斎木、今井富士雄に手紙。今井富士雄、帰還の通知あり。徳田秋声の随筆「思ひ出るまゝ」を読み出す。T・P・サルタン〔J・P・サルトルの誤り〕の「壁」をもう一度、読み返す。

三・四　昨日に引続いて暖かし。〔大阪市立〕美術館に天王寺展〔四天王寺展覧会〕を見に瀧島とゆく。藤井さんに大体の説明をきく。食堂で食券で定食。夜、何もしない。

三・五　春雨。今日、ふみ〔妻〕京都〔京都市左京区吉田にふみの実家がある〕へゆく予定だつたが、雨降りなので中止しようとする。幾世〝あしたになつたから京都へ行こう〟といつて聞かない。結局、仕方ないので何も持たず京都へ行くことにする。社で一日熱田神宮の記事。六時半、帰宅。久しぶりで一人切りで却つて落つく。夕食はふみが万端用意しておいてくれる。湯も沸いてゐるし、寝床も引いてある。

改造社の古い日本文学全集の徳田秋声集の古本を買つて来たので、代表作だけ一通り読まうと思ふ。

三・六　すつかり春の暖さ。カットの熱田神宮の記事をかいて、京都へゆく。繰さん、東京より帰洛。
四時から瓢亭で菓子の座談会があるが、その前に宗教欄の記事をとるつもりなので、平井君、部長より一足早く京都へ向ふ。駅へ降りると埃りのない空気がもう春のなまぐさゝを持つてゐる。風景いやに白く澱んでゐる。智積院へ行く、明後日の仁王会の支度で取込んでゐるらしく、玄関で、案内書一枚貰つて帰る。
それから大山定一に文芸時評の相談のため独逸文化研究所へゆく。もう三十分ほどしないと出勤せんそうなので、学而堂へゆく。高安君〔京大時代からの親友・高安敬義〕と逢ふ。プルーストの〝失ひし時を求めて〟の抄訳（井上究一郎訳）を買ふ。高安君と大急ぎで新進堂〔進々堂の誤りか〕でお茶をのみ、大山定一の部屋へゆく。十分程話す。大阪の中島栄治郎をすゝめる。
独逸文化研究所の前で高安君と別れて、瓢亭へ。周章てゝ来たのに誰も来てゐない。一時間ほど遅れて開会。閑休庵、オモダカ〔沢瀉〕久孝、河井寛次郎、藤田元春、それに、トラヤとドウキの菓子屋の主人。岩井〔武俊〕支局長と井上〔吉次郎〕部長。
岩井、井上、菓子について勝手な気焔上げてゐる。二人が中心になつて喋つてゐる。阿呆らし。料理も大してうまくなし。十時半、皆と途中で別れて、吉田〔岳父・足立文太郎宅〕へゆく。泊ることにする。
文次郎兄〔ふみの次兄・足立文次郎〕、敏夫さん〔ふみの末妹・千代の夫・大谷敏夫〕来てゐる。父〔岳父・足立文太郎。解剖学者・人類学者、京都帝国大学医科大学教授〕元気なり。六十二から高等数学を初めた話をする。実に愉快なり。
瓢亭の連中より大分人物が違ふ。

三・七　九時起床。朝疲れる。新進堂〔進々堂の誤りか〕でお茶をのみ、学而堂から、和辻哲郎「古社寺巡り」〔『古寺巡礼』か〕。外村繁「草いかだ」テーヌ「作家論」。電車の中で伊藤整の文学論をよむ。社で仕事なし。ふみ、幾世は京都で動物園を廻り、四時帰宅してゐる。夜、秋声のあらくれ読んでしまふ。際限なく続いて行きそうな小説だ。主人公の女の一生を書いてもこの調子では、平気で続けられそうだ。ふんだんに出る風景自然の描写は鋭し。この一篇で自然主義の小説がこれで解つたような気がする。

三・九　高安君から社へ例の如く手紙が来てゐる。家へ電話しておく。夜、御馳走。二三回ろくに御馳走しないで追返したからとふみが言ふ。八時ごろ食事を初めてゐると高安君来る。一時まで読書したり雑談したりする。八十円で詩集を作り、それで本屋の借金を整理することを大真面目で考へてゐる。五冊売れないだらうと言つてやる。高安君、村上〔専精〕〝仏教史〟〔『日本仏教史綱』〕ヴエルフリン〝美術史の根本課題〟を持つてくる。

三・十　十時まで眠る。天気がよいので、幾世、高安さん、ふみと四人で堤まで散歩。近いように思つてゐたが、田圃を突切るのはそうとうな行軍。向ふへ行つて、ふみが土筆を取つてゐる間に、高安さんと川向ふの村にアンパンを探しに行つて、珍らしく美味しいやき餅を買つてくる。いなむらの蔭の日だまりでおやつ。三時家に帰る。高安さん帰る。夜、〝春雷〟〔『大阪毎日新聞』のコラム欄〕の原稿。

三・十一　社で税務所へ出す所得税の申告書をかく。申告する身分になつた。といふ気がする。徳田秋声の短篇〝折鞄〟〝風呂桶〟を読む。これこそ典型的な心辺〔身辺の誤りか〕小説。〝折鞄〟など終世読んだ印象はおそらく消えぬものだらうと思ふ。妻の死を怖ろしい程冷静に突放して描いてゐる。

三・二十九　今日は吉野座談会。京都の母〔義母・足立ヤソ〕にもう一泊して貰ふ。二時、瀧さん〔瀧島〕と大軌〔大阪電気軌道〕で吉野へ向ふ。四時吉野着。ケーブル〔吉野ロープウェイ〕で京都府立第二〔高等女学校〕の香山〔益彦〕さんと逢ふ。
宿屋、場所は実にいゝが、田舎なので万事について気が利かぬ。服部如実、五時頃、川田順、市村其三郎、七時半ごろ。顔振れだけは全部揃ふ。サービスで疲れる。川田順例によつて少し酔払ひかける。吉さんは奈

良ホテル。相変らず自己主義ぶりを発揮する。
山の暮れかゝるのは美しい。これで桜が咲いたらさぞきれいだらう。併し夥しい観桜客を想ふと、うんざりする。高野より明るい。

三・三十　五時から眼覚める。隣室の親子連れ早朝より喧し。川田順、控の間に引越して寝てゐる。市村氏のいびきで参つた由。部長より電話で神宮前駅までタクシーを廻せといつてくる。自分本位のやり方が癪にさわる。人生で現在が最も花なのだらう。部長が社をやめてしよんぼりするのを見たし。十時より神宮で座談会。土地の人たちつまらぬ話くどし。川田順よく喋る。香山、女学教師らしく夢中になつて気嫌よし。三時の大軌で帰る。辻修二氏野球〔大阪毎日新聞主催の選抜高等学校野球大会（いわゆる「春の甲子園」）が三月下旬より開催中〕で来社。部長雛の絵を呈上。可笑し。完全に辻修二に敗け！　辻氏と梅田ホテルで中村女史と森君の話。夕食誘はれるが疲れてゐるので失礼する。京都の母、昼一旦帰りかけたが、幾世に泣かれ延ばした由。疲れ甚し。

三・三十一　早朝、京都の母帰る。起きてみるともう居ない。日曜。翠彩〔美術雑誌〕の原稿十三枚。

四・一　原稿ポスト。午後翠彩社の北沢といふ沖浦的青年来る。ビーコンでお茶。

四・二　明日の全航と陸は休むことにする。安本、瀧島、平井、みな休み。部長苦い顔。たまにはよし。

四・三　八野井君、辻修二に手紙。雑誌の小説。面白くなし。ひどい雨。

四・四　全航と陸の連中二時頃帰社。本山物語〔『大阪毎日新聞』での連載〕。四時より打合せ会。神社日本史また書物にするので、その割当。

四・五　吉野の座談会。瀧島大体書き、それに後から入れてゆく。ゲラ刷りの出来るまで居てくれと山口君がいふので、それまで瀧さんとビアホール。平野総務、社会部の丹羽、来る。総務どもりづめにどもる。相手辛し。全然気がおけないのでその点が取柄。教養がないと思ひ込んでるので、何と言はふが一向気にならぬ。七時社にゆく。ゲラ長すぎて削る。山口君の編輯、派手すぎて、ゴミ〳〵写真多く、肝心の記事入らず。平井君と帰る。喫茶店で珈琲のみ乍ら一時間ほどだべる。
十時帰宅。幾世ねてゐる。入浴すると十二時。

四・六　折口信夫の話を取りに美術館へゆく。川田順来てゐる。逢ふ度に軽蔑を深める。普通の人よりもつと数等俗人だ。が、あの俗つぽい貧しさは去年の暮、妻君をなくしてから身体の表面に浮き上つて来たものかも知れぬ。どんな不幸にしろ、不幸の影が美しく身につかぬ様な奴は大した奴でないに違いないだらう。
部長、紙雛の絵に讃をして貰ひたくて、風呂敷包みを持つて出掛る。こうなれば又徹底してゐる。講演、つぢつま合はぬ。社からの帰り瀧島とビアホール。憤りのみ身体の毛穴から血の如くふき出す。社の仕事で、短い一生をつぶすことの無駄を怖ろしく感じる。

四・七、快晴、日曜。午前中、藤原以前の日本画の勉強。フローベル全集、学而堂より来る。夕方、幾世つれて堤防附近まで散歩。百姓のオツサンが頬抱りして自転車にのつて通ると、〝のんきな父さん〟だと言ふ。実にぴつたりしてゐるので可笑しくなる。田圃の汚れを見て、水が汗をかいてゐるといふ。夜、フローベルの初期の作品〝情熱と道徳〟をよむ。十六歳の時の作だといふ。怖しい。ボヴアリー夫人の下書きのようなもの。明日からボヴアリー夫人を、出来るだけ丹念によんでみよう。

四・八　暖くすつかり春。平井君と歴史美術展〔大阪毎日新聞・大阪市共催の二千六百年歴史展覧会〕。九時まで折口信夫の先達の講演をかく。七時ごろ岩崎君久しぶりで訪ねてくる。北京駐在になつて明日立つといふ。ビーコンで一時間ほど話す。相変らず文学のファン。面白い。夜、竹代、お

すし持つてくる。千代ちゃん〔ふみの末妹・大谷千代か〕お腹が痛くなりかゝつてゐたからといつて直ぐ帰る。

四・十二　暖いので昼から、ふみと幾世芦屋へゆく。千古さん〔ふみの長兄・足立千古（ちふる）〕九州から帰つて一度も訪ねてないので――。社で雑事に忙殺。部長は東京。五時退社。阪神で駿河屋の羊羹買つて芦屋へ。十時まで千古兄と話す。

たえちゃん〔千古の娘・多栄子〕の踊りをみる。帰り幾世眠つてしまふ。

四・十三　平井君とビーコンから出てくると、瀧島がいゝ話をしてやると言ふ。聞くと吉ツさん学芸部長より顧問に転落のニュース。吻とする。停年まで後四年程、あの卑しさに仕へなければならぬかと思つてゐたが、意外に早くザ・エンド。ひどくさつぱりした。是で、いやなことがなくなる。誰も彼も嬉れしそうに興奮してゐるところをみると、余程不人気だつたらしい。これで絵のうす汚いおつきあいはなくなる。彼奴がやめたら、どんな顔するだらうと思つたことは何回あつたか知れない。後は石川均一。まだこの方がよさそうだ。八野井君からポンカン来る。怖らく彼の事だから部長のところへも送つてゐる事だらう。平井君も碁のサービスも終りだらう。とにかくさつぱりした。辻平一、平井、瀧島みなあまり好くなし。その点、自分は関係なし。又別の意味で繰さん、八野井も却つて困るだらう。新しい気持で仕事を初めよう。

四・二十八日　日曜、久しぶりで仕事なし。ふみ幾世は京都、小母さんの二人、実に清潔、少々手持無沙汰の感なり。昼ごろ、前から気になつてゐる中山氏のところに林檎持つて見舞にゆく。留守。小さい家、ごみ〳〵した所なので、家における闘病生活思ひやられる。家へ帰つて眠る。間もなく起される。中山氏追かけて来る。ずつと肥つてゐる。負けん気だから病気に勝つてゆくのだらう。夕食を食べるかときくと食べてもよさそうな返事なので、小母さんに御馳走して貰ふ。村上専精の〝日本仏教史綱〟読み初める。

四・二十九　月曜、面なし。三時ごろから消えて京都へゆく。〔堂本〕印象氏宅へゆき、汪精衛に社から贈呈した龍の絵のお礼、五百円持つてゆく。まだ病気全快せず臥床。五三良〔印象の兄で陶芸家の堂本漆軒（本名・五三郎）〕夫妻が代理として出てくる。それから岡崎美術館で日本画展をみる。入選作のみ。前によく見てなかつたので――。それから、吉田。文さん〔義兄・足立文次郎か〕夫妻が来てゐる。小供大勢、物凄し。ふみ上京（はま子〔末妹・波満子〕の結婚式）取止め、草香さんに診てもらふ。大したことはないらしいが――。九時、文さんと木屋町の「山勝」といふ家へゆく。エロ絵などそこの娘さん出して来る。十二時の終電で帰宅。

四・三十　今日も仕事なし、平井君と散歩、野田家で昼食。ニワタに洋服をみにゆくがなし。夜。

五・二　風邪気味、喉痛し。上京を決し兼ね、ぎり〳〵まで家に居る。京都の父より今度の風邪は肺炎になり易い故、上京を見合せといつて来る。ふみと行けないし、思ひ切つてゆくことにする。幾世は昨日より熱高し。寝台、京都を過ぎる頃より眠る。

五・三　九時東京着。久しぶりの山ノ手線、青葉が実に美しく見える。直ぐ中野〔長妹・静子の婚家が中野にある〕へゆく。夕方までみんなで話す。夕食は葡萄酒にお寿し――心許りの波満子を送る祝宴。明日のお嫁さんの衣裳などをつめたトランクを持つて、父〔実父・井上隼雄。退役軍医〕、明さん〔静子の夫・石川明〕等三人で日本医師会館へゆく。一階へ這入つた時はひどい所だと思つたが、二階三階にゆくに従つて、なか〳〵よく出来てる。ホテルも気がおけなくてよし。隣りの夫妻者に悩まされる。文次郎兄、朝商用で来て泊つてゐる。起しても起きない。

五・四　朝食はトースト、卵、珈琲。簡単だがうまい。カラー、ブラン、フイルム等を買ひに二回、駿河台のお茶の水駅前の通りまで出る。十時半、波満子と母〔実母・やゑ〕来る。井上家控室に陣取る、やがてマリー

ルイズの美容師来る。二三枚、はま子の写真をとる。

父、賢二さん〔やゑの次兄・井上賢二〕、水戸の小父さん、間宮〔父方の従兄弟・間宮精一〕、浅田〔父方の親戚〕来る。最後に式の直前、千古兄来る。

式は一時間程。式後に鈴木功〔親戚〕来る。六時半から披露宴。披露宴の少し前に、沼津の森田の母〔森田通子〕と娘〔弟・達の婚約者・森田衣子〕来る。衣子さんといふ娘さん、甚だ不美人。二人とも達〔弟〕のことばかり心配してゐる。太田の両親〔波満子の結婚相手・太田謙三の両親〕とも話す。どちらも大変よささうな人なり。

九時前に宴会終る。雨。自動車で百人のお客さんをお茶の水駅まで送る。こちらのお客さんも一同揃つて帰る。自分一人こゝに泊る。

五・五　十時まで疲れて眠る。午近く中野へゆく。一時に父母と三人で四谷の太田家へゆく。親父さんはもう商売。一時間程、向ふの両親と話す。みんな気のおけないいゝ人等だ。謙三さんと波満子は親戚廻り。外出嫌ひの謙三が、午前中廻つて、その上、もつと行つて来ませうと言つたとお母さんが笑つてゐる。暫くすると新婚夫妻も帰宅。「波ま子さん、窓際の方へ、どうぞ――」といつた調子。明るい感じがこつちにも映りさうだ。太田両親、とこちらの両親、四人で仲人さんの家へ礼にゆく。暫らく、謙三さんに写真みせて貰つてゐたが、波ま子が休めぬと思つて帰宅。途中、森君へ電話するが出社してゐない由。

五・六　一時三十五分で帰洛に決定。二時間程余裕があるので東日〔大阪毎日新聞社が合併した東京日日新聞社〕へ寄る。誰も居らぬ。銀座へ出て珈琲をのみ、再び東日へゆく。辻修二と上でお茶をのみ乍ら暫らく話す。辻、山口に一寸立話して辞去。

東京駅へ、父、母、庄田義郎〔『しろばんば』のおぬい婆さんのモデル・かのの甥・庄田美郎か〕等が来てゐる。中野へ忘れて来た帽子を持つてくる。これから銀座へ三人で出ると言ふ。何か父と母も義郎さんにくつゝいてゐるようで淋しい。母が何故か、女給か仲居上りの如く見える。喉に湿布して黒いスカーフを巻いてゐるせいかしら。車中で、河端〔川端〕康成〝小説研究〟〔『小説の研究』〕とT・E・サルドル〝すゐかずら〟〔ティエリイ・サンドル『すひかづら』〕を読む。十一時京都着。波満子熱高し。父相変らず例の俺は豪くなつたなあと言ふ。科学者らしいが、科学者に精神的な何かゞ欠けてゐることを物語られるような気がする。併し、老人でこれだけの稚気を持てる人はやはりないかも知れぬ。

五・七　朝、京大新聞の〝旧友〟〔井上靖作の掌編小説〕をよむ。がらん〳〵した頭で、あはたゞしく書いた物としては上出来かも知れぬ。併し方々に大きい文章の欠陥が眼につく。

五・九　一日なすなし。

今夜からフローベルの〝ボバリー夫人〟をよむ。

五・十四　趣味欄の記事で宇治へゆく。京都駅でふみへ電話をかけてみる。今夜一緒帰るつもりだつたが、出血するので診察して貰つたら、多分妊娠してをり、出血のことはまだ解らぬといふ。とのこと。うんざりする。京都支局の森田氏と一緒に宇治。六時までかゝる。夜、足立〔ふみの実家〕と大谷〔ふみの末妹・千代の婚家〕。ふみ、がんの場合の心構へする。幾世、お父さん、お父さんと言ふ。

まづ当分一人の生活――一人の生活の腹をきめ、尤も能率的に勉強できるように生活を再組織しようと思ふ。森君の轍を踏む勿れ。

五・十九　日曜、昨日の電話でふみ入院せずにすむらしいので、安心した。やはり妊娠〔長男・修一を身籠っている〕。一日家で過す。

畠の苺赤くなつた。世話しないのに喰べれるとは申し訳ないみたいもの。昨日、京都で今井富士雄と一時間程話す。あまり勉強にならぬ。――文学の話はちぐはぐ。

五・三〇　此の間からフローベル「ボヴアリー夫人」、兵隊さんの「火の赤十字」〔松坂忠則著〕梶井基次郎「のんきな患者」その他、雑誌の小説など読んだ。「ボヴア

リー夫人」には文句なしに引きずり込まれた。女性をあんなに判然り描き出したものは他に比べるものがないと思つた。ボヴアリー夫人をあんなにしたものは何だらう。それは女性すべてだが、心と肉体の中に持つてゐるものだ。それをフローベルが引きずり出して赴くところに赴かしめた。運命などといふものではない。

梶井基次郎のものは志賀直哉と共通する。志賀の短篇〝城崎にて〟〔「城の崎にて」〕も最近よんだ日本の作家のものではやはり、一番感心した。

ふみの留守に長年頭にくすぶつてゐるものを吐き出して終はふと思ふ。

九・二十三　秋季皇霊祭。〝無蓋貨車〟、大体の構想は出来てゐるし、細部に渡つてノートもしてあるので一気に書いて終ふつもり。十月十日に脱稿の予定。

夜七時から十二時まで、仕事。

七時　起床

八時――九時半　読書その他。

九時半　出社

六時　帰宅

七時―十二時　仕事

十二時　就寝

~~七村承吉~~

（昭和十九年）

一・十一　日記をつけるのは何年振りだらう、少し楽しい。昨夜小林啓三君と印象さんの衣笠の家に行き帰宅十一時半、それから食事したりして結局寝たのは二時だつたので、今朝九時まで眠る。幾世すでに学校へ出掛けた後。通知簿を失くしたのでしよげて登校したことだらう。明日足立の父の記事を平井、藤田両名が書きに行き、夜京都の家で御馳走することになつてゐるので、ふみや子供たちも一泊どまりで接待かた〴〵今日午後からゆくことにする。二日に、修一〔長男〕と卓也〔次男〕の風邪で京都へ年始に行けなかつたので、ふみはお年始の里帰りでもある。四時頃までに家を片附けて出掛けるやう云ひおいて十二時出社。このところいつも午過ぎの出勤、のん気に構へてゐる。振鈴〔『毎日新聞』の読者投稿欄〕一つ書き、武藤金太氏とお茶、この人闇取引の話しかせぬ。闇取引にうつゝを抜かしてゐる。椿油の小ビンを貰ふ。小谷〔「闘牛」の津上のモデル・小谷正一か〕と竹葉の通りの河に面した喫茶店にゆく。コブ茶と米汁のやうに味のない薄いミルク。平井、藤田君に明日一時吉田の家を訪ねて貰ふやう約束。昨日貰つた局長賞の御礼を本多氏へ。購買組合に大口借用を八百円から千円にきり替る件をきゝにゆく。大丈夫と思ひ込んでゐたのに八百円まででいつぱいだといふ。主任若林氏に直接交渉、六月に一度に二百円返済の約束で交渉三十秒で成立。やれやれ。五時半、和田女史と日本橋の虎屋旅館に辻氏の見舞。すつかり弱つてゐる。明日家に帰りたいといふ。明日京都へゆくので自動車の世話は和田女史に依頼。帰社後、自動車部の福田氏に自動車を廻して貰ふやう依頼、長岡局長から話をして貰つてあるのでしぶ〳〵承諾。尤も実際にタクシーは不便らしい。九時帰宅。しいんとして静か。十二時まで久しぶりで落ついて手紙を二三本。

朝青木大乗より色紙を贈られる。甚だ変てこな日輪と波。この人なぜ素直になれぬのかしら。或は不器用な人かも知れん。

一・十二　九時までぐつすり眠る。朝食自炊。夜京都から帰つて世話のないやうに床をひき、幾世と修一の床に湯婆まで入れておく。天野さんの若奥さん来て、京都より電話で来る時、メリケン粉、玉葱、白菜等を持つて来てくれといふ。荷物いろいろ多くなる。十一時家を出る予定が一時になる。吉田の家に着いて暫くすると平井君来る。二階で父話す。森田さん（京都支局の写真）修一とおぢいさんを一枚撮してくれる。それから大学の研究室へ、自分だけ少し後れて行く。森田さん四五枚撮して帰る。五時吉田に帰る。藤田君、食事初めてから来る。父相変らず足立文太郎の連発。学問の話をしてゐる時は立派で厳然たるものがあるが、他のことになると、何か話の落ちや、くだらぬ効果を考へ、聞いてゐて愉快ならず。俗臭紛々たるものがあるが、併し八十歳にして尚この俗気を払へず稚気満々

たるところはやはり常凡ならずと言ふべし。九時藤田、平井両君帰る。十時にすでに眠つてしまつた幾世、修一を起し帰る。いつもより暖い晩で助る。帰宅後、伊豆からのお餅を焼いたりして就寝は二時。昼、本屋の学而堂に立寄つてみると、主人は徴用ですでに工場にゆき、妻君が店をやつてゐた。

一・十三　昼出社。一時に阪急まで、辻氏に会ひに犬飼、和田女史と行く。奥さんついてくる。社の自動車で加藤病院にゆく辻氏と別れて珈琲を探すがどこにもない。ここ一月許りの間にすつかり珈琲は影を消して終つた。三時、放送局の笠野半爾君来社。喫茶店で、〝おすまし〟すゝり乍ら話す。謄写版の詩の雑誌を出さうといふ。見本まで作つてくる。その熱に動かされた形、日曜に家に来て貰つてよく相談することにする。小林啓三君とお茶。日展社長におさまつて益々敏腕を逞しうせんとしてゐる。いろ〳〵企画の相談をうける。四時に社を出て京都にゆき三百円千代ちゃんに餡代として渡す。七時帰宅。一日なすなし。

一・十四　寝汗、疲れてゐるので九時まで眠る。一時出社、振鈴。武藤金太氏、ローションの見本持つてくる。一合七円、使つてみてよければ買つてやるといふ、二人で桜橋の喫茶店で豆炭のコンロを囲んで話す。例によつて武藤氏の話は食料物色の話、この人など最もこの時局が身に応へてゐる一人だらう、可笑しくもあり、気の毒でもある。居残り、キタ一で一円四十銭の情ない定食、マツヤスで一円六銭の定食、それから社の食事、これでやつとお腹が承知する。九時半帰宅、火も消えてゐるし、ふみはすでに寝てゐるし、少々不愉快になる。

一・十五　十五日正月。お供へをお粥の中に入れる。午前中にふみ通知簿紛失の詫びに学校にゆく。修坊とのんびり日向ぼつこ。手伝ひの小母さんに貰つた石炭の始末、半歳分位はある。有難いことである。十二時ふみ帰宅。通知簿は先生の手許に出してあるといふ。何が何だかわからぬ。十二時半に家を出て直ちに阪急

で病院通ひの辻氏夫妻に会う。一緒に便乗して病院までお供、二時過ぎ出社、小林啓三君と例の桜橋の喫茶店でお茶――みかんとすまし。武藤氏しよんぼり入つて来る。小林君のユダヤ問題の得体の知れぬ摑みどころのない話をきく。面白いがどうかと思ふ。七時帰宅。土曜日らしく子供たちと一時間程遊ぶ。朝京都より電話にて相談ある故、明日の日曜来いとのこと。怖らく八十のお祝ひのことだらう。明日笠野半爾氏が来ることになつてゐたので、電話で断る。次の日曜にして貰ふ。

一・十六　八時起床。午前中二階の書斎片附、午後風呂の水汲、三時に家を出て京都に向ふ。朝、足立の父からの手紙で二三日前送つてやつた先日社の森田さんの撮つた写真が気に入らぬといふ電話があつた。京都にゆくと既に千古、文次郎両兄来てゐる。

　用事は父の伝記出版の相談と時節柄広い家に老人夫婦二人では他の人が移り住む心配があるので、誰か親戚の人に来て貰ひたいといふ相談。後者の件は文次郎兄が移り住んだことにして米の配給を吉田で受けておくことにして解決。伝記編纂はなるべくなら生きてゐるうちに出版したい由、学問上のことを木原先生〔京都帝国大学医科大学教授として、足立文太郎から解剖学第二講座を引き継いだ木原卓三郎〕、他を僕がやること、しかも近い将来にやつて貰ひたいという意嚮――時局柄出版の六難しいこと、伝記など而も生存者の伝記など時代が要求してゐないこと、事実上木原さんもこちらもそんな暇のないこと等々考へ併せると甚だ虫のいい注文、大分ゲーテ賞〔足立文太郎は、一九四二年に始まった日本ゲーテ協会によるゲーテ賞の第一回受賞者〕以来天に上つて了つた形だ。可笑しくもあれば腹も立つ。兄弟まあいゝ加減に応待してゐる。文さんと千古さんは出版費の方を受け持てといふ。しかも相当立派な本でないと気に要らぬ由、千古さんもよう言はんわの形。併しまあなるべく八十の老人の納得するやうに原稿だけでも作つておいてやらうと思ふ。どうせ一度は伝記を作ることもあるだらうし、いろいろの昔話もきいておかねばならぬのだから、今までやりかけて来た口述筆記を少しスピードをかけて続けてゆくことにする。夕食は例の如くみんなで一杯のむ、節子さん〔千代の夫・大谷敏夫の末妹・河合節子〕が河合さん〔節子の夫〕の伊勢の実

家に大谷の子供たち多勢を連れてゆき、お萩をお土産に持つて帰つてくる。みんなでお接伴になる。十時千古さんと一緒の省線で帰る。親父大分ボケテまた、ゲーテ賞はエポツク・メーキングだつたなといふ。全くその通りである。帰宅後久しぶりの風呂に入る。

一・十七　十二時出社、振鈴、一時阪急に行き辻さん夫妻に会ひ、足立の父宛の加藤甚七院長の手紙を手渡す。小林君からの珈琲机の上にある。有難し。三輪さんの原稿直して使ふことにする。七時帰宅、久しぶりでうまい珈琲。深尾、大伴、高安、藤野〔高安をのぞき、それぞれ四高柔道部時代の友人・深尾立雄・大伴重治・藤野威儀か〕留守宅へ手紙。

一・十八　十二時半出社、豊田君とジヨウシヨウ橋〔浄正橋か〕の化粧品屋に行き、ポマード一打と歯磨粉多量もとめる。三輪晃勢氏の原稿書き直し。夕刊に足立の父のことを書いた平井君の原稿がのる。二版の方が三版より少し長い。兎に角予想以上に大きく派手だし、平井君の文章もうまい。世界的学者として紹介してくれたので、足立の父も是では満足だらう。立売の夕刊十部程買ふ。買手多くそれ以上求められず。社でさへ五部貰ふのは一寸気がひける。新聞一、二部の入手さへ困難になつて来た。帰宅七時、伊豆から小包二個――卵、サツマの切干、菓子、メザシ、トロロ芋等、少量づつだが色々送つて貰ふ。有難い。

一・十九　五時より文化奉公会理事会。新町裏の白楽天といふ支那料理屋に行く。京大の松岡さん（支部長）と中軍報導部の某中尉来てゐる。全部で十四、五名。某中尉はやはり権力をぶちつけるやうな嫌な一面をみせる。美校〔京都市立絵画専門学校か〕西垣籌一氏と一緒に省線で帰る。

一・二十　居残り、火の気がないので社寒し。

一・二十一　社会部藤田君と五時社を出て辻氏見舞。ゼンザイを御馳走になる。藤田君の躰を心配して長岡局長、本田次長二人共藤田君を社会部副部長にせぬ由、

それで小林社会部長が困つてゐるといふやうな話を辻氏がする。斎藤と藤田君二人の将来は実に面白い。辻氏は斎藤が嫌いらしいが、人間の面白さではずつと斎藤の方がいい。仕事のソツのなさでは或は藤田君の方かも知れぬが。九時辞し、十時帰宅。

一・二十二　鳥飼君を招んで「よしみ寮」でふぐの御馳走する。酒ないのでウヰスキーが出る。一杯三、四円とられると思ふとぞつとしない。それでも愉快に話す。社の、しかも広告あたりには珍らしい人。去年いろ〳〵珍らしい物を貰つたお返しのつもり。帰途駅の喫茶店でコブ茶をのみ乍ら、二十分程駄弁る。

一・二十三　日曜、今日は放送局の笠野君が来る約束の日なので、家を片附ける。午後一時の約束だが来ないので一度駅まで出てみてあきらめる。畠の百姓のオバサンの所へ大根（カブラ）を買ひにゆく。いよ〳〵この二三日野菜まで配給殆んどなき由。大根下げて帰宅すると向ふから笠野君来る。ふみにお土産のカブラ二貫匁買はす。二人の詩の雑誌の相談。この人なら雑誌をやつてゆくのもいいと思ふ。それに雑誌でもない限り、この時節には何も書けさうもない。雑誌はいよいよ少くなるし、作家など帰農する人の噂が多い。岸田国士も福島の田舎へ帰農する由新聞に出てゐた。

夕食何もなし。ビール一本と、野菜鍋だけ。ないとなつたら全く何もなし。それでもいろ〳〵喋り乍ら笠野君九時半までゐる。雑誌の題名、紙、表紙等の物色を至急決めることを約束する。朝、大伴、藤野の奥さんより手紙。藤野は目下ラバウルにゐる由、友の武運を祈る。今朝の新聞にもラバウルに百何十機来襲の報あり。奥さんの手紙には「無事に帰つてくれることを信じてゐます」とある。

大伴夫妻が昨年夏、藤野出征の時、静岡まで出向いた由、知らなかつたとはいへ、自分の出向かなかつたことが悔ひられる。大伴の手紙も久し振りでなつかしい。今年あたりは二人共召集だらうから会ひたいとあり。

一・二十四日　疲れて九時起床。山口広一どこかへ行つて休んでゐるので早目に出掛ける。振鈴、毎日のことで煩し。辻氏から電話で阪急まで出向いてくれといふので出掛る。もう大分元気。子供さんの小学校のことで他に寄留したき由、西宮通信部主任に様子をきいて貰ひたい由頼まれる。六時帰宅。久し振りで風呂。

一・二十五　十一時出社、山口広一に建艦画展で東京に出張させろといふ。一泊ならいいといふ。ぎり〳〵二泊三日でなければ駄目だといふ。考へておくといふ。莫迦らしくなる。一日取合つてやらぬ。鳥飼君とお茶。先夜のお礼にお汁粉を持つて来てくれる。〔橋本〕関雪の絵を叔父さんがほしいと言ふ。二千円以上なら手離す考へ。昼きたいいちで一円四十銭の昼、昔なら三十銭でもこんな不味いものなし。夕食は食堂と松安。松安もひどい。パン一ケ食べずに子供たちの土産。池田君、赤ちゃんの乳に入れるものを持つて来てくれる。親切な気持有難し。帰宅するとみんな夕食中、珍らしくはも、何週間振りで魚気のある食膳、今夜から夕食は家では原則的にとらぬことにする。米の不足甚し。不経済だが致し方なし。借金の整理及月収の整理（十九・一・二五現在）〔これに左頁の一覧が続く〕

一・二六　鳥飼君と美術館に大東亜戦争美術展を見にゆく約束があるので十時半出社、地下鉄でゆく。中村研一、宮本三郎、関雪の三点よし。ことに中村研一のものに感服。帰社後武藤氏とお茶。森田食堂に三時に券を貰ひにゆき、五時食べにゆく。八十銭で先づ上等。中村屋で一時間並び日本酒コップ一杯。これでもお腹承知せず松安へゆく。四円七十五銭と二時間半かけてどうにか満足、居残りだが寒いので八時半帰宅。家では社から配給の粕漬の粕で粕汁。子供たち美味しがつてたべた由。いよいよ超非常時の感である。社に久し振りで野間君より来信、二月三日休暇で社を訪ねる由。

一・二八　鳥飼君とお茶、明日か明後日、関雪の軸を見に来るやうにすゝめる。都合悪しといふ。関雪の

Ⓐ

〔借金〕

購買組合	1,000円
浦上君	750
質屋	350
先借	125
小口	50
宴会費	100
文化研究会	60
	2440

Ⓑ

〔月収〕

給料	125
手当	10
家族手当	20
食事手当	12
住宅手当	13
	180

〔定期給料引〕

甲種勤労所得税	1.70
食券	4.50
国民貯蓄	6.00
	12.20

〔定期収入〕

居残料平均	10.00
京都出張平均	20.00
	30.00

★手取月収　197.80

Ⓒ

〔賞与月（六月・十二月）収入〕

義務紙代補助	3.65
賞与	225
奨励金	173
特別補正金	50
	451.65

〔賞与月給料引〕

甲種勤労所得税	46.00
毎日会会費	7.00
健康保険料	5.20
国民貯蓄	79.00
〃　〃	6.00
	143.20

〔給料〕　180.00

〔給料引〕

食券	4.50
	★ 483.95

〔例月収入余剰高〕

★ 286.15

Ⓓ

中間賞与月（九月・三月収入）

〔賞与〕　77.00

〔給料引〕

勤労所得	12.90
国民貯蓄	

㋑

〔定期生活費〕

家賃	33.00
牛乳	24.00
洗濯代	10.00 平均
薬代	10.00 平均
電灯代	4.00 平均
新聞代	1.30
配給米	20.00 平均
配給雑費	6.00 平均
酒	3.00
砂糖	0.70
菓子	0.70
醤油	1.20
塩	0.08
石ケン	0.30
毎日配給（野菜ソノ他）	30.00
炭・マキ	3.50
	★ 141.80

〔定期支出〕

町内貯金	5.00
婦人会貯金	2.20
ソノ他	3.00 平均
	★ 10.20

〔毎月支出〕　★ 152.00

㋺

〔定期支出〕

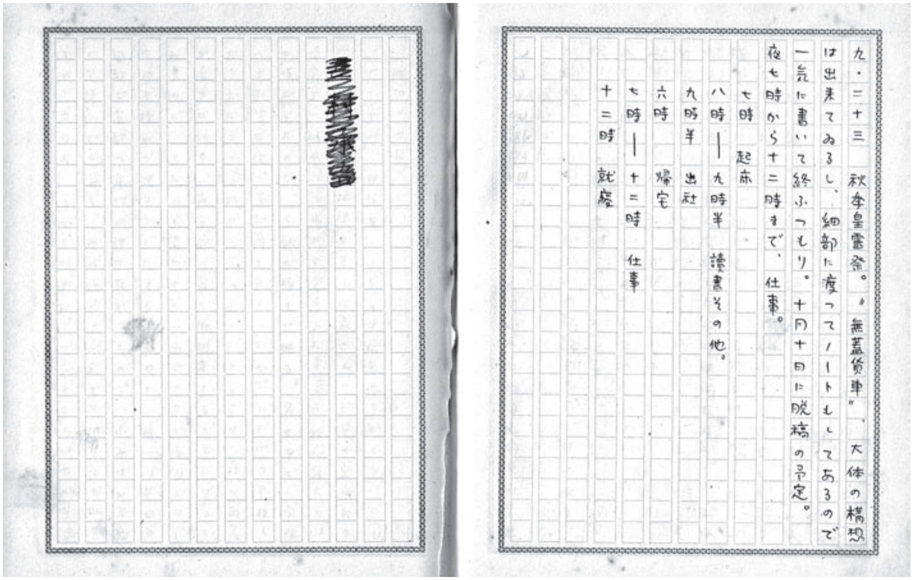
12月保険料　189.90

軸も甚だ気乗薄の印象。やゝ期待外れの気持で、当にしてゐただけにがくんとする。大東亜戦争画展を見にゆく。二度目。一時間程で帰る。正午社に笠野君来る。雑誌出版許可が六難しい由、二人の合著詩集のやうな単行本形式にすることにする。題決まらず。笠野君来社の折、社の階下で片桐君子〔作家・大庭さち子の本名〕女史と半歳振りで会ふ。去年後半以来、生活そのものが戦ひで何も書けぬといふ。実際物を書く暇はないだらうと思ふ。

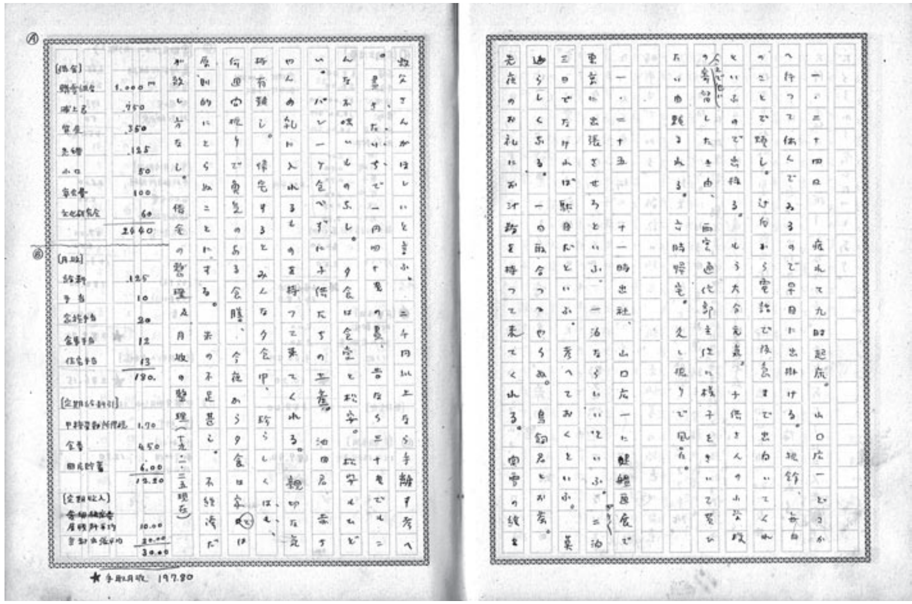
一・二十九　振鈴片附けて京都に行くことにする。鳥飼君、富田君とお茶。谷崎潤一郎の「聞き書抄」〔『聞書抄』〕を富田君に買つて貰ふ。店頭には出ないといふ。二時に社を出て京都に向ふ。今日は寒さが幾分増しなり。停車場で吉田へ電話して夕食を頼んでおき、須田国太郎、森守明氏宅へ電話、須田氏不在六時頃帰宅の由。森守明氏宅へ晩かた〴〵絵の催促にゆく。急いでゐるので玄関で辞す。途中産寧坂で、アカハダ焼のキウス二個、近頃どこにもキウスないので——。別の家で静子〔長妹〕へのお土産の茶セン一ケ。この辺は用事なくぶら〳〵したら嘸、楽しいところだと思ふ。須田氏のところへ二回電話、結局六時半になつてもまだ帰宅してゐないので、吉田へゆく。おぢいさん新聞で大悦び。例によつて豪くなつたを連発して子供のやうだ。八時半、もう一度電話して九時に須田さんの家へゆく。二階の乱雑の書斎。華文雑誌「文友」〔占領下の上海で発行されていた中国語雑誌〕に書く談話をとり後は雑談。話し初めたら例により切りがなし。漸く話を打ち切り、雑誌の装訂を頼んで十時半辞去、一時間半程ゐるのにお茶一杯出さず、炭は須田さん自身がふいておこす。電話で訪ねることは解つてゐながら随分気が利かぬと思ふ。階下の乱雑なのと思ひ合せて、奥さん一寸どうかしてゐるのかも知れぬ。東山線の電車なか〳〵来ないので、省線なくなると大変なので自動車。仁王門より駅まで二円四十銭。十二時帰宅。

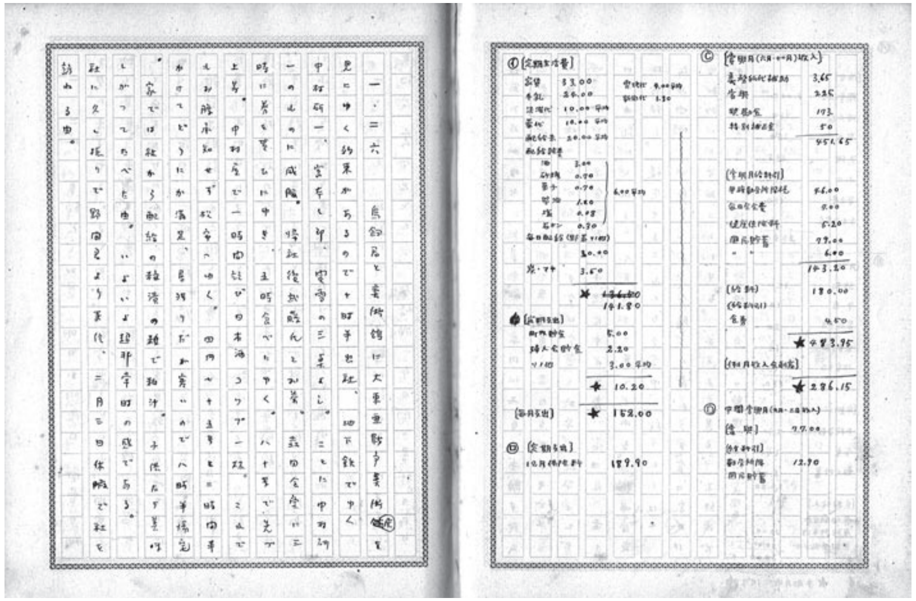
一・三十　日曜　八時まで寝る。九時より十一時まで防空演習。組内だけなのでのんきな練習。小川さんの息子さん夫婦、特別に参加。小川さんの息子さんらしくバケツリレーの大家、なか〳〵詳しい。午後風呂の水汲、幾世を床屋に連れてゆく。修一は午後より機嫌悪いと思つたら頭が大分暑い、炬燵に寝かす。夜風呂、十一時過ぎ就寝。

一・三十一　伊豆と静子の所へ今度の日曜三島へ行くことを報せる。静子にはお米を持つてゆかなくてもいゝかを問合せる、伊豆には父か母か都合ついたら三島まで出向いて貰ふことを頼む。出社してから弁当を持つてこないことに気付く。どこへ行つても売り切れ。一度帰宅、ホツトケーキ。四時再び出社、六時帰宅、午後のニユースはマーシヤル諸島へ敵の大部隊出現、わが陸海航空部隊と激戦中を報ず、刻々事態容易ならざるの感深し。安西冬衛来社、詩集「大学の留守」を貰ふ。昔読んだ「韃靼海峡と蝶」などが入つてゐるので懐しい。感覚主義の作品、拾ひ読みして昔程感服せず、日本的なものはどこにもなし。併し七八年前の自分の詩がこの人の影響を受けてゐたことを今更にみせつけられる。これだけではいかん、これだけでは——



ペンネーム案「乙村承吾」が別の太いペンで消されている（1940年9月23日の次頁）





借金と収支を几帳面に整理している（1944年1月25日）

解説

高木伸幸

一九四〇年三月一日〜九月二十三日

まず当時の井上靖の本業、新聞記者としての活躍を辿ってみたい。

三月二十九日、三十日に「吉野座談会」を取材し、四月五日にその座談会について「瀧島大体書き、それに後から入れてゆく」と記している。当時井上靖は同僚が書いた原稿を添削し、仕上げていく役割を担っていたのである。該当の記事は「吉野山を語る——現地座談会／遠き桜樹の由来／修験道場たる存在と文学に見る吉野的性格」との見出しにより、四月七日『大阪毎日新聞』に掲載された。川田順（歌人）、市村其三郎（大阪高等学校教授）、香山益彦（京都府立第二高女教諭）、服部如実（真言宗醍醐派伝法学院主監）らを含めた計九名[*1]が出席し、桜の名所である吉野山について多方面から語り合っている。日記で指摘されている通り、写真が多い紙面構成となっている。

三月三十一日に「翠彩の原稿十三枚」とあり、翌四月一日には「午後翠彩社の北沢」という青年の訪問が記されている。井上靖は美術雑誌『翠彩』第二巻第三号（一九四〇年五月二十三日付）に美術評論「伝統について」[*2]を発表しており、その「原稿」と見て間違いない。井上靖は美術記者として、社外からも注文を受けていたのである。

四月四日には「神社日本史」を「書物にする」ための「打合せ会」があった。一九四〇年十一月、星野書店より大阪毎日新聞社文化部編『神社日本史』が発行されている。前号「解説」で触れたように、「神社日本史」は同年一月九日から四月十一日まで計五十二回に亘って『大阪毎日新聞』に連載された特集記事で、井上靖も無署名ながら五つの神社について執筆を担当していた。従って、この『神社日本史』は、井上靖が参加した共著ということになる。これまで文壇登場以前に井上靖が刊行した単行本としては、浦上五六との共著『現代先覚者伝』（筆名・浦井靖六、一九四三年四

月、堀書店）が知られていた。『神社日本史』はそれより二年半も早い井上靖の単行本として注目されたい。

四月六日に「折口信夫の話を取りに美術館へゆ」き、八日には「折口信夫の先達の講演をかく」。当時の『大阪毎日新聞』を見ると、四月十一日に「上代の日本人（上）」、翌十二日に「語部と文学　上代の日本人（下）」と題する折口信夫の「日本歴史講話」の「大要」がそれぞれ掲載されている。[*3] 講演録ゆえに井上靖が創作した文章そのものでなく、署名も見られないものの、井上靖がまとめた記事と見做すことはできよう。

五月十四日には「趣味欄の記事で宇治へゆく」。五月十九日『大阪毎日新聞』の「趣味」欄を見ると、「茶どころ時世相／古格の誇りに挑戦する機械茶／茶摘み唄も軍歌調／宇治茶」と題した大きな記事があり、末尾には「井上生」と署名されている。こちらは全集未収録の井上靖作品と判断できる。その文面は娯楽色が強く、見出しなどは幾分か戦時色も感じさせる。しかし、宇治茶の起源として「栄西禅師」「栂尾の明恵上人」ら僧侶の活躍に言及しており、宗教欄も担当していた井上靖の興味の一端が表れている。紙幅の都合から本文引用できないのが残念である。

もう一点、三月十日に戻ると「〝春雷〟の原稿」とある。当時の『大阪毎日新聞』を調べると、不定期に記者が交代で担当する「春雷」と題するコラム欄が存在していた。その三月十三日付を全文引用する。

春雷　貼紙絵

昨年末東京で開かれた特異児童の作品展で、清君の貼紙絵が画壇を賑はした。さきに天才少女の綴り方が文壇でやかましかつたのと比較して、この種の作品の美しさの性格を論じた文章を散見したが、さらに広く女医の救癩手記「小島の春」あるひは従軍看護婦の「病院船」などを含めて考へると、専門的な芸術訓練を経ない素人の作品がここ一二年喝采を博してゐる興味ある現象をみる。そしてこの種の作品が厳密に優れた芸術作品であるか否かの問題は別にしてともかく当今芸術の虚を衝いて、それに欠けるある種の魅力を蔵してゐ

ることは否み難い。いまにこの分でゆくと小学児童や女学生のクラス劇が大劇場のフツトライトを……なんて心配も起りさうだ。とまれ意識的な芸術方法を持たぬ素人の作品の成功を前にして、専門作家は一つの反省を必要とする。それは現代作家が多かれ少かれ、先行する夥しい方法論に溺れてゐるといふこと、そしてために美的効果の計量において、美そのものの相がいつか変形され、素人の作品にみるぢかに働きかける魅力の喪失を来してゐるといふことだ。問題の児童の特異な色感の構成は、つまり彼が現代画家の美的教養から解放されてゐるところにその秘密を持つてゐる。

（Y・I）

Y・Iとの署名、美術評論風の内容から、井上靖の原稿と断定して差し支えあるまい。全集未収録作品として、これまた大いに注目されたい。

「清君」とは、貼絵画家として今日なお人気の山下清である。知的障がい児養護施設である八幡学園の子供たちによる「特異児童作品展」が、前年十二月八日から十二日まで銀座の画廊・青樹社で開催され、中でも山下清の貼絵作品が注目を集めていた。[*4]「天才少女の綴り方」とは、大木顕一郎・清水幸治編『綴方教室』（一九三七年八月、中央公論社）に収められた豊田正子の文章を指す。当時ベストセラーとなり、映画化もされた。[*5]「小島の春」と「病院船」も、当時広く読まれたベストセラーのタイトルである。[*6] つまり同時代の芸術文化に幅広く目配りしながら、専門家と異なる素人作品の魅力を考察している。後年作家として時事的な話題を積極的に取り入れ、大衆の嗜好にも配慮した井上靖の創作姿勢に通ずる文章と言えよう。

次に井上靖が文学に対して如何なる思いを抱いていたか、読書や創作に関する記述から探ってみよう。

三月一日には「執筆」の予定時間が書き留められている。主に新聞記事の「執筆」を指すのかもしれないが、「平日」以外にも「五時間」取ろうとしているのを見ると、文芸作品の「執筆」もそこには含まれてい

たと言えよう。後述の通り、井上靖は実際にこの当時においても小説を書き、構想を立てていた。記者として活躍しつつも、それだけでは飽き足らず、創作の道を密かに志していたのである。

同日には読書計画も記している。井上靖の旺盛な読書欲に改めて驚かされる。「ジイド　芸術論」、「アラン　文学語録」などは、いずれも翻訳刊行から半年も経ていない、いわば当時の新刊本であった。三月六日に記した「プルーストの〝失ひし時を求めて〟の抄訳（井上究一郎訳）」も同様である。[*7] 井上靖は最先端の文学を熟知し、直ちに吸収しようとしていたのである。

梶井基次郎「のんきな患者」（一九三二年一月『中央公論』）を志賀直哉「城の崎にて」（一九一七年五月『白樺』）に比するなど、独自の解釈も見せている。さらにフローベル「ボヴアリー夫人」には「文句なしに引きずり込まれた」と絶賛している。後年井上靖は同作について「一生忘れることのできない書物」の一つとして挙げ、「女の一生」の描き方について「教わった」小説だと語っている。[*8] その「ボヴアリー夫人」から受けた影響の大きさがここに確認されるのである。

ちなみに「ボヴアリー夫人」では、ヒロインのエンマが愛人レオンと馬車でパリの街を当てもなく、やみくもに長時間移動している。[*9] 井上靖の「あした来る人」（一九五四年三月二十七日～十一月三日『朝日新聞』）を見ると、ヒロイン山名杏子が密かな恋愛関係にある大貫克平とタクシーで都内をやはりあてどなく彷徨っている。後者の場面に前者のそれが影響を及ぼしていると言えるかもしれない。

五月七日には「京大新聞の〝旧友〟」を読んでいる。井上靖は掌編小説「旧友」を一九四〇年五月五日『京都帝国大学新聞』に発表しており、[*10] その自作に目を通したということである。「あはたゞしく書いた」とあるように、記者として多忙な毎日を送る中で時間を見つけて「執筆」したのであろう。

五月三十一日から九月二十二日に至る長い空白を置いて、九月二十三日に改めて一日の計画を記している。「乙村承吾」というペンネーム案を記しつつ、消去したことも確認できる。さらに「無蓋貨車」というタイ

トルを掲げ、その構想を明かしている。井上靖は一九五一年一月『新聞協会報』に同じタイトルの小説を発表している。「衝心性の心臓脚気」に見舞われた「私」が「石家荘の野戦病院へ行くために」「元氏という小さい駅」から「無蓋貨車の一つの車輛へ乗り込」む様子を描いた千五百字程度の掌編である。日記に見る「無蓋貨車」は、この掌編「無蓋貨車」のおそらく原型であろう。

井上靖は該当のエピソードを『新聞協会報』掲載作に留まらず、その後もエッセイ、小説で繰り返し取り上げている。[*11] 作者にとって貴重なモチーフのいわば出発点がここに窺われるのである。

交友関係や家族に関わる記述にも触れておきたい。

三月六日、九日、十日に登場する「高安君」。京都帝国大学時代からの友人高安敬義である。井上靖は散文詩「石庭」「友」（二作とも一九四六年五月『学園新聞』）で高安の戦死を悼み、エッセイ「忘れえぬ人々」（一九六五年一月～十二月『主婦の友』）で二人の交友関係を詳述している。高安敬義は「八十円で詩集を作」る相談をしていたようであるが、実際に高安は一九四〇年四月一日付で京都市の学而堂より詩集『収穫』を出版している。行分け詩を三十七作収め、扉には「若き日の為に親しき知友に捧ぐ」と記している。

四月十三日には「吉ツさん」（井上吉次郎）が学芸部長から顧問へ転落したと知り、「吻と」している。前号「解説」でも触れた通り、後に良好な関係を築いた井上吉次郎に対して、当時は少なからぬ反撥心を抱いていたのが確かめられる。

五月二日より六日まで上京し、妹波満子の太田謙三との結婚式・披露宴に出席している。既に日中戦争下で日米開戦の約半年前にあたるが、「マリールイズの美容師」に来てもらうなど、それなりに豪華なイベントであったようである。これから親戚となる太田家の人々に対して好印象を抱いているのは、妹の結婚が嬉しかったからだろう。

五月六日に東京駅へ来てくれた「庄田義郎」は、井上靖の戸籍上の祖母かのの甥、庄田美郎の可能性が高

い。かのは「しろばんば」（一九六〇年一月～一九六二年十二月『主婦の友』）に描かれたおぬい婆さんのモデル。井上家の籍に入る前は庄田姓であった。「父と母も義郎さんにくつゝいてゐるようで淋しい」という複雑な感情も、あるいはこの戸籍上の祖母を想起してのことかもしれない。

同日、帰洛後に登場する「父」は岳父、つまり解剖学者であった足立文太郎を指す。「俺は豪くなつたなあと言ふ」その姿に対して「精神的な何か」の欠落を指摘している。この岳父に向けたコメントについては、「一九四四年一月十一日～一月三十一日」の間にも同趣旨の文言があり、そちらで改めて言及したい。

一九四四年一月十一日～一月三十一日

この間において何より注目されるのは、井上靖が借金を重ねていたことであろう。日記を再開した一月十一日に八百円の借用を千円に上げてもらっている。二十五日には借金の整理表を記し、計二千四百四十円の借金を抱えていたことがわかる。当時芥川賞の賞金が五百円であった[*12]ことを考えると、かなりの金額と言ってよい。同僚より「（橋本）関雪の絵を叔父さんがほしいと言」っていると聞かされ、「二千円以上なら手離」そうと考えている（二十五日）。谷崎潤一郎の著書も別の同僚に売り払っている（二十九日）。いずれも借金返済のためと見られる。

井上靖の長篇「氷壁」（一九五六年十一月二十四日～一九五七年八月二十二日『朝日新聞』）では、主人公魚津恭太がしばしば給料前借をしている。そこには作者自身が投影されていたのである。

岳父足立文太郎に関わる記述にも留意したい。

一月十二日に「吉田の家」（足立文太郎の自宅）と「大学の研究室」で文太郎について取材があり、十八日には「夕刊に足立の父のことを書いた平井君の原稿」が載ったとのこと。一月十八日『毎日新聞』[*13]夕刊を見ると「闘ひに『老齢』なし／研究室に籠る／八十歳の京大足立博士」との記事が確かに掲載されている。その記事の中で、文太郎は「人間これは確かな仕事だと思つたら何でもいいから全身をうちこむ」と言い、「こんどの静脈の研究」は完成の目処が立たない故に「一輯二輯と分冊の形で出してゐる」と語っている。後に井上靖は文太郎をモデルに「比良のシャクナゲ」（一九五〇年三月『文学界』）の主人公を造形した。解剖学研究にひたすら打ち込むその三池俊太郎をまさに彷彿させる発言である。

ただし、井上靖は文太郎に「俗臭紛々たるもの」を感じたと記し、「伝記出版の相談」を受けた際には「甚だ虫のいい注文」で「可笑しくもあれば腹も立つ」と考えている。一九四〇年五月六日の日記でも、先に触れた通り批判的なコメントをしていた。井上靖は「私の自己形成史」（一九六〇年五月～十一月『日本』）などで岳父に対する敬意を記しているが、実際は否定的な感情、幾分かの厭悪感も抱いていたのである。だが、その上で文太郎の「稚気満々たるところ」に「常凡なら」ざるものを感じている。最終的には尊敬に値する人物と見做していたと言えよう。

アジア・太平洋戦争の開戦から約二年、終戦まであと一年半という時期にあるだけに、戦時下での暮らしぶりも表れている。「珈琲」（コーヒー）が「どこにもな」く（十三日）、「米の不足」は「甚し」い（二十五日）。食糧事情が日々切迫していたのが見えてくる。それでも井上靖は「ウヰスキー」（二十二日）や「ビール」（二十三日）を飲んでいる。酒に目がなかったのでもあろうが、当時としては比較的贅沢な食生活をしていたようである。借金が嵩んでいたのもその影響であろうか。

記者としての活動に目を向けると、学芸記事の執筆とおぼしき記載が影を潜めている。十一日には日本画家・堂本印象を訪ねているものの、その訪問を記事にしたことが確認できる文面はなく、当時の『毎日新聞』にもそれらしい記事は見当たらない。二十九日に洋画家・須田国太郎から談話を取っているが、その掲載予定の『文友』は「華文雑誌」、国策的な中国語雑誌であった。毎日新聞社の分館文友社が日本占領下の上海で主に発行していた。

代わりに「振鈴」との二字をしばしば記している。

この「振鈴」とは、文字数五百字で戦時下の生活に意見する読者投稿欄である。例えば十二日の当欄には、「大阪・末吉生」との署名で、「一枚の慰問文」「一冊の雑誌」を送るなどして「前線の兵士の心を鼓舞」すべきだと主張した文章が掲載されている。

　戦況の深刻化により紙面は戦争関連の記事中心に編集されていた。その影響で井上靖は純粋な文化・学芸記事を書く機会を失い、いわば代替の仕事として読者投稿欄の編集をしていたのであろう。学芸記者として辛い毎日だったかと推察される。日記の文面からあからさまな不満は伝わってこないものの、二十四日の「振鈴、毎日のことで煩し」という一文などには井上靖の本音も垣間見えよう。

　そうした状況の中でも文学に関連した交流が見られることに注意したい。笠野半爾と一月十三日、二十三日に詩誌を出す相談をし、二十八日には二人の合著詩集出版の検討をしている。笠野半爾は『麵麭の雪』（一九三二年九月、青樹社）、『柊冬青（ひいらぎそよご）』（一九三四年五月、青樹社）など発行部数を限った詩集を出版していた詩人である。詩作への熱意を持った人物であった故に、井上靖は「この人なら雑誌をやってゆくのもいい」と考えたのだろう。

　三十一日には、モダニズム詩人として知られる安西冬衛との交流も確認できる。井上靖は非常時においても創作欲を決して失わずに保ち続けていたのである。

*1 他に加島諦忍（如意輪寺住職）、大橋清尚（官弊大社吉野神宮宮司）、山田文造（大本山金峰山寺執事）、岸田日出男（奈良県技師）、井上吉次郎（『大阪毎日新聞』学芸部長）が出席。司会を井上吉次郎が担当している。

*2 『井上靖全集』第二十五巻（一九九七年八月、新潮社）収録。

*3 この折口信夫の講演会は大阪毎日新聞社と大阪市が主催した「二千六百年歴史展覧会」に関連した企画であり、大阪市立美術館を会場としていた（一九四〇年四月三日『大阪毎日新聞』社告参照）。当日記の四月八日に「歴史美術展」とあるのも、この「二千六百年歴史展覧会」を指す。

*4 三頭谷鷹史『宿命の画天使たち―山下清・沼祐一・他―』（二〇〇八年六月、美学出版）参照。

*5 映画『綴方教室』は山本嘉次郎監督、高峰秀子主演、一九三八年八月公開。豊田正子著・山住正己編『新編綴方教室』（一九九五年七月、岩波文庫）参照。

*6 小川正子『小島の春』（一九三八年十一月、長崎書店）、大嶽康子『病院船』（一九三九年十月、女子文苑社）。後者の書名は、前号掲載の一九四〇年一月十九日の日記にも見られる。

*7 ジイド『芸術論』（河上徹太郎訳、第一書房）は一九三九年十月に、アラン『文学語録』（片山敏彦訳、創元社）は同年十一月に初版が刊行された。「プルーストの〝失ひし時を求めて〟の抄訳（井上究一郎訳）」は、一九四〇年一月に弘文堂より初版が出たプルウスト作・井上究一郎訳『心の間歇』と見られる。

*8 井上靖のエッセイ「読書について」（一九七三年一月『読売ブッククラブ』）及び小俣正己・稲垣信子共編『井上靖　高校生と語る―若者への熱いメッセージ―』（一九九二年一月、武蔵野書房）参照。

*9 岩波文庫より一九三九年四月、フローベール作・伊吹武彦訳『ボヴァリー夫人』（上・下）が出ており、井上靖はそちらを手に取った可能性が高い。本稿も同文庫版を参照した。

*10 『井上靖全集』第一巻（一九九五年四月、新潮社）収録。

*11 エッセイでは「忘れ得ぬ人々」（一九六五年一月～十二月『主婦の友』）、「夕暮れの富士」（一九七四年一月『オール読物』）、小説では「異国の星」（一九八三年六月一日～一九八四年三月三十一日『日本経済新聞』）にそのエピソードが用いられている。

*12 週刊朝日編『値段史年表―明治・大正・昭和―』（一九八八年六月、朝日新聞社）参照。

*13 「大阪毎日新聞社」は当初『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』の二つの新聞を発行していた。しかし一九四三年一月一日、社名から「大阪」を取って「毎日新聞社」と改称し、二つの新聞の題号を『毎日新聞』で統一した（毎日新聞130年史刊行委員会編『「毎日」の3世紀―新聞が見つめた激流130年―』上巻（二〇〇二年二月、毎日新聞社）参照）。従って井上靖の勤務先とその発行紙の名称は、今回公開した日記の前半部分（一九四〇年三月一日～九月二十三日）までが「大阪毎日新聞社」と『大阪毎日新聞』、後半部分（一九四四年一月十一日～一月三十一日）より「毎日新聞社」と『毎日新聞』となる。

［付記］当時の『大阪毎日新聞』『毎日新聞』の本文は句点のみで読点を用いていないため、紙面からの引用では読点を補っている。また旧字体は新字体に改めルビは省いた。

ふたりの井上靖

黒田次郎（井上靖孫）

祖父が亡くなったのは、私が十五歳、高校受験のただ中の一月のことだった。塾から帰宅するなり、祖父が危篤であると母から伝えられた。築地の国立がんセンターへむかう静かで薄暗い車中には、厳しい表情で目に涙を滲ませる母の横顔があった。身近な人が死ぬという経験のまだなかった私は、感情の置きどころが見つけられずにいた。病院のベッドに横たわる祖父の躯と対面しても、祖父が亡くなったという実感は湧かなかった。

祖父は亡くなったのだということを、私が現実のものとして受けとめることができたのは、東京世田谷の自宅へ、祖父が戻ってきた時であった。祖母や伯母たちが祖父の衣を整え、髭を剃っていた。傍で見ている私に、伯母が、「人は亡くなっても髭がのびるのよ。きれいに剃ってあげないと」と言った。

祖父の死顔を眺めながら、私はこうやって祖父の顔をまじまじと見るのは初めてだと思った。生前の祖父は無精髭を生やした姿を私たちに見せなかったのだと気づいた。世田谷の家の洗面所に並んでいた馬毛の歯ブラシや、髭剃り、整髪剤……、白髪にほんのりと黒髪が残り、薄くなった髪を撫でつける祖父の姿をなにげなく見つめていたことを思い出した。

＊＊＊

幼い頃から、週末になるとよく世田谷の家へ遊びにいった。家へあがると、「おじいちゃんにご挨拶してきなさい」と母から促され、兄と二人で書斎に籠る祖父のところへ行かされた。

書斎の襖を開けると、老眼鏡越しにするどい眼差しが飛んでくる。しかし、すぐに柔らかい顔つきに変わり、「お前たちはどこのガキだ?」と問いかけられる。幼かった私には、邪魔するなと怒られているのか、それともからかわれているのか、よくわからなかった。困惑する私と兄の受け答えはいつも決まっていて「佳子の長男と次男です」。

今思えば、祖父はおどおどする孫の様子を楽しんでいたのかもしれない。祖父は子供が好きだが、決して扱いが得意ではなかった。

中学生になり、思春期真っ盛りのある日、私は変形学生ズボン（いわゆる「ボンタン」のこと）を履いたまま世田谷の家へ遊びに行った。普段、先生や親から服装についてチクチク言われ鬱陶しく感じていたので、その日もきっと母が祖父母へ愚痴をこぼし、祖父母から何か言われるのではないかと身構えていた。だが、祖母からは何も言われなかった。

少しほっとしつつ、どうせ祖父母は変形学生服が何か知っちゃいないのだろうと思った。

数週間後、また世田谷の家へ遊びに行くと、着くなり祖母が「おじいちゃんのズボンを見てごらん」と言う。いつものように挨拶ついでに祖父の書斎へ行き襖を開けると、そこにはテレビで見る水戸黄門みたいな祖父がいた。祖父はまるでモンペのようなズボンを履いていた。

居間へ戻ると、祖母は「この前、次郎の履いていたズボンを見て、おじいちゃんも履いたら楽そうだったから、仕立屋に何着か作らせたわ」と言って笑った。病気で少し弱った祖父への、祖母の愛情が感じられる出来事だったが、それだけでなく、祖母はユーモアをまじえて、私への気遣いをしてくれたのだと思う。

井上靖といえば着物姿のイメージが強いが、晩年の祖父は、作務衣姿の寺小僧のような格好で書斎に籠っていた。生地は黄門様ほど明るい色ではなく、紺青色

だったと記憶している。

勉強が好きではなかった私は、高校へは一般受験ではなく柔道の推薦で進学した。その選択は、受験直前の時期に祖父が亡くなったことと関係している。祖父の死を目の当たりにして、誰でも入れるような学校へさしたる目標もなく進学するよりは、祖父が人生を通じて携わってきた柔道に自分も深く触れてみたいと思ったのである。今の自分の言葉で表現すれば、祖父の思いを継ぐ孫がひとりでもいた方がよいのではないかということになるが、そんな大仰なことでもなく、祖父の死がごく自然に、当時の自分をそのような方向へ導いてくれたのだと思う。

私は世田谷学園高校に進学し、柔道私塾・講道学舎の寮に入った。そこでは生活のすべてが柔道だった。寮には柔道場があり、歴代師範や塾の創設に関わった方々の写真が飾ってあった。その中に祖父もいた。練習中はもとより、練習後に道場を掃除するところまで、毎日が祖父に見守られているような不思議な感覚があった。顔をまじまじと眺めたことのない生前の祖父よりも、道場で見守ってくれる、今は亡き祖父の方が、私には身近な存在だった。

祖父はよく「井上先生」と呼ばれていた。それはもちろん作家としての「先生」である。祖父が世間では偉い作家であることはもちろん子供心にもわかっていた。だが、私自身は祖父のことを「先生」だと思ったことはなかった。幼い私にとって祖父はただの祖父、「おじいちゃん」だったからだ。

しかし、講道学舎に入塾すると、仲間や先輩後輩、卒業生、井上靖のことなどほとんど知らない中学生までが、祖父を「井上先生」と呼んだ。小説など読むよりは柔道柔道の毎日を送る塾生たちである。その「先生」は、柔道人としてのそれだったのだろう。

名古屋大学で高専柔道を教えていた小坂光之介先生、講道学舎で私を柔道の世界へ導いてくださった横地治男会長など、祖父が柔道を通して関わった多くの方々から、私の知らない柔道人としての祖父の話をうかがった。そのうちに、私にとっても祖父は自然に「先生」になっていった。もちろん、他の塾生と同じく、それは柔道人としての「先生」であった。

＊＊＊

講道学舎の柔道場にかけられた写真。中央が講道学舎創立者の横地治男先生、右端が祖父・井上靖

私の中には、ふたりの井上靖が生き続けている。

ひとりは、柔和な表情で「お前たちはどこのガキだ?」と尋ねてくる、子供好きの「おじいちゃん」。父である私は、祖父のようなあたたかさをもって、ふたりの息子に接することができているだろうか。SNSやインターネットの時代だからこそ、祖父が描いた伊豆・湯ヶ島の清らかな物語をふたりと一緒に読み、そして語り合いたい。自然の尊さを学び、純粋で真っすぐな感情を育んでほしい。

祖父と筆者。1981年頃、世田谷の家の庭で

もうひとりの井上靖は、柔道を通じ、後世に何かを残そうとした「先生」。私は柔道を通して、人の息使いや距離感を学んだ。それはミドリ安全株式会社というメーカーの営業部門で、様々な人々と接しながら働く今の自分の礎（いしずえ）ともなっている。これは、作家ではなく、柔道人としての祖父から私が学んだものなのかもしれない。

講道学舎の道場で、若い学生であった孫の私を見守ってくれていたのは、いったいどちらの祖父だったのであろうか。

事業報告

井上靖記念文化財団事務局

一般財団法人井上靖記念文化財団と旭川市の間に締結された「井上靖記念事業の実施に関する協定」により、両者は日本文化の振興及び発展への寄与を目途に協力して井上靖記念事業を実施いたしました。新型コロナウイルスの感染によって残念なことに事業が滞っておりましたが、旭川市の「井上靖記念事業実行委員会」の全面的な協力を得て、令和四年度から再び「井上靖記念文化賞」をはじめとする、下記の文化事業を実施・運営することができました。

（一）文化賞授与事業

第六回井上靖記念文化賞は、令和四年十一月十八日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の推薦を募集し、令和五年二月十八日に開催した選考委員会において、詩人の吉増剛造氏を井上靖記念文化賞に、和光大学名誉教授で私塾「成城寺小屋講座」代表の山本ひろ子氏を特別賞に決定しました。

吉増氏は、「一九七〇年の『黄金詩篇』の刊行以来、半世紀以上に及ぶ詩作活動を行っており、詩の朗読パフォーマンスの実践により、現代日本を代表する詩人とも評価されていること」、山本氏は「古文書の読解により、中世日本の神話の世界を再発掘し、独自の神話学、神道学、宗教学を構築した業績が認められること」による受賞でした。

令和五年五月二十日（土）に旭川市において贈呈式及び受賞記念講演会を開催しました。吉増剛造氏は

「井上靖の詩心について」、山本ひろ子氏は「中世の異神と旅をする」という題目での講演でした。

（二）国内外における日本文化の研究助成

○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』への刊行助成を行うとともに（第二十一号が令和四年七月に刊行）、同会のホームページ管理にも助成を行いました。

○オーストラリア・ニュージーランド

平成十八年度に、オーストラリアにおける日本文学の研究奨励のため、シドニー大学に設立した「井上靖賞」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和四年度も活動を中止いたしました。

○ベトナム

平成二十七年度に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で開始した「井上靖賞・日本文学研究論文コンテスト」の第六回は、令和四年十月三日より募集を始めました。令和五年八月三十一日までを募集期間とし、同年十月に審査結果の発表、同年十二月に授賞式を行うこととなりました。

また、令和四年度、ベトナムの出版社ニャ・ナム出版・コミュニケーション株式会社がベトナム語に訳した井上靖『しろばんば』の出版に対して、助成を行いました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○本財団ホームページ

更新・管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和四年七月十五日、『旭川市井上靖記念館報』第二十二号の発行に協賛しました。

常設展示の他に、左記の企画展三回と特別展、さらに第二回企画展に伴う講演会を、本財団と共催で開催

しました。

第一回：「井上靖 最後の長編『孔子』への道」展（令和四年五月二十八日～九月二十五日）

第二回：「井上靖 人と文学13 柔道」展（令和四年十月一日～令和五年一月二十九日）

令和五年一月十日、井上靖記念館開館30年記念講演会『「北の海」と私の柔道』講師・小菅正夫氏（柔道家、元旭山動物園園長）

第三回：「井上靖の文学碑――碑が語ること」展（令和五年二月四日～五月二十一日）

特別展示：「萩原朔太郎大全２０２２――井上靖と萩原朔太郎」展（令和四年十月一日～令和五年一月二十九日、多数の文学館・美術館等との同時期開催企画展）

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○長泉町井上靖文学館

常設展示の他に、以下の企画展を本財団の後援で開催しました。

企画展「あなたに贈る最初の1冊――はじめての井上靖」展（令和四年三月十二日～九月十三日）

企画展「歴史へのとびら――北条・徳川ゆかりの人々」（令和四年九月十七日～令和五年三月十四日）

（四）近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行う他、井上靖の資料収集・調査研究を行っている本財団機関誌『伝書鳩』第二十三号を十二月に発行しました。

（五）講演会などの開催事業

○青少年エッセーコンクール

旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で第十一回「井上靖記念館　青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象に実施されました。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館理事長）、赤木国香（北海道新聞社文化部長）の両氏です。今年度の募集テーマは「美」で、応募総数二九四編の中から中学の部六作品、高校の部六作品を入賞に決定しました。表彰式は令和四年十二月十一日に市内の井上靖記念館で開催されました。

最優秀賞

中学校の部：萩原万央「知ることと美」（白百合学園中学校二年）

高校の部：満山志帆「美を教わる」（福島県立葵高等学校三年）

北海道新聞社賞

中学校の部：宮城莉子「「美」を信じる」（沖縄県立開邦中学校三年）

高校の部：両角みなみ「黒い蝶～生と死の美～」（東海大学付属諏訪高等学校三年）

優秀賞

中学校の部：盧馨儀「勝利の女神」（筑波大学附属中学校二年）

高校の部：辻本千尋「べっぴんさん」（桜丘高等学校二年）

佳作

中学校の部：田邉花名「一対一の美」（筑波大学附属中学校三年）・鹿住結和「憧憬の地」（白百合学園中学校二年）

高校の部：大沼優花「「美しい」を表す」（静岡県立韮山高等学校二年）・宍戸美来「宝石が降った九月六日の夜に」（北海道旭川永嶺高等学校二年）

井上靖ナナカマドの会賞

中学校の部：上田百恵「私とピアノ」（旭川市立緑が丘中学校三年）

高校の部：小山絢嘩「オノマトペの魔法」（北海道旭川永嶺高等学校二年）

予定していた井上靖記念館等における井上靖文学に関する講演会等への助成は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。

○あすなろ忌

令和五年一月二十九日の井上靖の命日に、伊豆市湯ヶ島町の熊の山墓地と天城会館劇場ホールで、伊豆市、伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会主催、長泉町井上靖文学館、本財団等の後援で、「あすなろ忌」が開催されました。墓参（去年に引き続き、長泉町井上靖文学館主催でオンライン墓参も開催）ののち、「井上靖感想文・感想画コンクール」の表彰式（三年ぶりの開催）、椎名誠氏による講演「井上靖と椎名誠のあやしいつながり」、砂野友来氏によるピアノ演奏が行われ、開催に係る経費を助成しました。

また、伊豆市の天城湯ヶ島町民劇団「しろばんば」の演劇公演も新型コロナウイルス感染症の影響により行われず、本年度における助成は実施されませんでした。

「井上靖感想文・感想画コンクール」は応募作品四四七点から以下の十五作品が入賞いたしました。

感想文

最優秀賞

小学生の部：鈴木悠里奈「しろばんば」（伊豆市立天城小学校六年）

中学生の部：諏訪由季「洪作の選んだ道」（筑波大学附属中学校三年）

優秀賞

小学生の部：石田丈汰郎「疑問」（伊豆市立土肥小中一貫校六年）、髙岡子花「あすなろ物語から考えた「克己」」（伊豆市立土肥小中一貫校六年）

中学生の部：櫻井紫音「自分を正す方法」（筑波大学附属中学校三年）、寺本有沙「新たな世界での未来」（筑波大学附属中学校三年）

ふるさと賞

小学生の部：荻島加帆「しろばんばを読んで」（伊豆市立天城小学校六年）

中学生の部：太田偉月「しろばんばを読んで感じたこと」（伊豆市立中伊豆中学校一年）

風景画

最優秀賞

中学生の部：久保田彬元「井上靖と上の家」（伊豆市立修善寺中学校三年）

高校生の部：加藤木那白「変わらない日々」（三島学園知徳高校一年）

優秀賞

中学生の部：鈴木悠唯「ある日の帰り道」（伊豆市立修善寺中学校一年）

高校生の部：永田咲妃「緑」（三島学園知徳高校二年）

佳作

中学生の部：小野寺雫羽「思い出の家」（伊豆市立修善寺中学校一年）

高校生の部：鈴木美歩「光る森」（三島学園知徳高校二年）

ふるさと賞

中学生の部：杉山果保「洪作が登校中に見た景色」（伊豆市立修善寺中学校三年）

（六）特定寄附事業

令和四年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催し等がありました。

○井上靖記念館（旭川市）

「井上靖 短編を読む」、①「利休の死」（令和四年五月十四日）、②「晩夏」（八月二十日）、③「明妃曲」（十月二十九日）、④「墓地とえび芋」（令和五年三月四日）、講師・平野武弘氏、朗読・塩尻曜子氏（井上靖ナナカマドの会会員）

令和四年五月五日、「井上靖生誕日記念事業 無料開館・ミニコンサート」、演奏・山口健（チェロ）、西川香（ピアノ）

令和四年七月九日、文学講演会「言葉の流星群（名句・名言）――井上靖の没後30年に際して」、講師・藤澤全氏（元日本大学教授）

令和四年十月八日、文学講演会「孔子と『論語』――企画展「井上靖最後の長編『孔子』への道」に寄せて」、講師・石本裕之氏（旭川工業高等専門学校嘱託教授）

令和五年一月二十八日、「あすなろ忌朗読会」（『あすなろ物語』）、朗読・塩尻曜子氏・勝浦恭子氏（井上靖ナナカマドの会会員）

○井上靖ナナカマドの会（井上靖記念館内）

令和四年八月二十五日、『赤い実の洋燈（ランプ）』五十八号発行

○長泉町井上靖文学館

令和四年十一月二十七日、講演会「詩と長泉と井上靖と」講師・水沢なお（詩人）

令和四年九月十七日～十一月二十九日、「しずおか文豪さんぽ」（沼津市との共同事業）の展示と、スタンプラリー、文学散歩の実施

（八）役員

令和四年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々でした。

理事長　浦城義明
専務理事　井上敦夫
理事　井上修一　岡崎正隆　狩野伸洋　野崎幸宏　佐藤純子　勝呂 奏
監事　高田敏和
評議員　井上卓也　浦城幾世　相賀昌宏　表 憲章　小西千寿　篠弘（故人）　三木啓史　山口 建

（五十音順）

なお、長年、本財団の評議員を務めてくださった歌人の篠弘先生が令和四年十二月十三日にご逝去されました。これまでの格別なご厚情に深く感謝するとともに、衷心より故人のご冥福をお祈り申し上げます。

また、令和二年度から、旭川市より本財団の監事をお引き受けくださっておりました高田敏和氏が、旭川市教育委員会・社会教育部長から旭川市監査事務局事務局長に人事異動されたことに伴い、令和五年六月十三日にご退任なされました。これまでご指導ご鞭撻をいただき、誠にありがとうございました。なお、旭川市教育委員会社会教育部長の佐藤弘康氏が、同日に開催された評議員会において、後任の監事に選任され就任をご承諾くださいました。

井上靖の長男で、本財団の前代表理事を務め、昨年より理事を務めていた井上修一氏が、私事により令和五年三月三十一日付けで退任されました。同じく次男で、長年本財団の評議員を務めていた井上卓也氏も、私事により同年六月十三日に退任されました。それに代わり、次女の黒田佳子氏が、同日に開催された評議員会において、新たに評議員に選任され就任しています。

令和五年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次のとおりです（令和五年十一月三十日現在）。引き続き、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

理事長　浦城義明
専務理事　井上敦夫
理事　岡崎正隆　狩野伸洋　野崎幸宏　佐藤純子　勝呂 奏
監事　佐藤弘康
評議員　浦城幾世　黒田佳子　相賀昌宏　表 憲章　小西千寿　三木啓史　山口 建

（五十音順）

令和四年度の事業を協力して実施していただいておりました「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々です（令和四年四月一日当時）。

委員長
黒蕨真一（旭川市教育委員会教育長）
副委員長
児玉真史（北海道新聞旭川支社長）

十河宣洋（NPO法人・旭川文学資料友の会会長）
委員
荒川美智（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川市井上靖記念館長）
高田敏和（旭川市教育委員会社会教育部長）
監事
三原一仁（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川文学資料館長）
那須かおり（北海道新聞旭川支社事業担当）

（九）住所・連絡先

一般財団法人　井上靖記念文化財団
〒一五六—〇〇五三
東京都世田谷区桜三丁目五番九号
電話・FAX：〇三—三四二六—九八三六

井上靖記念事業実行委員会　事務局
〒〇七〇—〇〇三六
旭川市六条通八丁目　セントラル旭川ビル七階
旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内
電　話：〇一六六—二五—七五五八
FAX：〇一六六—二五—八二一〇

◉井上靖文学館五十周年記念式典

長泉町井上靖文学館の前庭に設置された井上靖のブロンズ像（堤直美さん制作）

井上靖存命中の一九七三年に開館した井上靖文学館が五十周年を迎え、二〇二三年十一月二十五日に、遺族や長泉町関係者などが出席し、記念式典が執り行われました。

式典では、長泉町在住の彫刻家・堤直美さんが、五十周年を記念して制作した井上靖のブロンズ像が初披露され、テレビドラマ「しろばんば」にも出演された女優の山本陽子さんが、自身の演じたさき子にまつわる箇所を朗読されました。また、井上靖が新聞記者時代に伝書鳩で記事を送っていたことにちなみ、鳩の風船を参加者が空に放つセレモニーも行われました。

井上靖文学館は二〇二一年にスルガ銀行から長泉町に譲渡され、町営の文学館として再スタートをきりました。企画展や講演会、ワークショップ、出前授業など、井上靖の作品を読み継ぐ活動を精力的に行っています。ブロンズ像となった井上靖が待つ文学館に、ぜひ足をお運びください。

遺族や長泉町関係者らによって鳩の風船が大空に放たれました

長泉町井上靖文学館
〒411-0931 静岡県駿東郡長泉町東野 515-149
☎ 055-986-1771
Facebook　Twitter　Instagram

編集後記

『伝書鳩』二十四号をお届けします。

連載二回目となる「終戦前後日記」の今号掲載分には、一九四〇年九月二十四日～一九四四年一月十日までの空白期間があります。この空白期間には長男・修一が生まれ、続いて次男・卓也が生まれ、幼児だった長女・幾世は小学生になっています。ただでさえ戦時中ですから、身体が小さく足の不自由だった妻ふみの妊娠出産を、靖は懸命に支えていたのだということを、日記の空白が却って物語っているようです。

今後も『伝書鳩』をどうぞよろしくお願い申し上げます。

西村承子

伝書鳩　第24号

発　行　二〇二三年十二月二十日

編集者　西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三－五－九　井上方

印刷所　株式会社　厚徳社

発行所　一般財団法人　井上靖記念文化財団